
Silver Cat

銀猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Silver Cat

【Nコード】

N1117U

【作者名】

銀猫

【あらすじ】

人間を糧とする悪魔。又は、私利私欲に走った人間。

そんな『闇』を見張り、必要があれば処理する特殊部隊<凶犬>。

『地獄の番犬』とも呼ばれ、どんな部隊より恐れられる”彼ら”を率いるのは、天使のように無垢な少女だった――

「無垢って言うより、凶悪でしょ」

「・・・何か言った？」

「隊長、怖いですって!!」

「副隊長、せめて無邪気ぐらいに・・・」

無邪気(?)な少女と、そんな彼女に仕える優しい悪魔(と個性豊かな隊員達)が東奔西走するお話。
ほぼ、一話完結。

不機嫌な上司の扱い方

ジリリン・・・ジリリリン。

濃霧が立ち込むある日の早朝、漆黒家の屋敷に鳴り響いたのは、目覚まし時計。

ではなく、固定電話だった。

「こんな時間に・・・」

主人のために朝食を作っていた黒は、すぐに受話器を取った。こんな音で主人を起こしたら・・・不機嫌な事、間違いナシだ。

「もしもーし」

「すいません。隊長、起きてませんか？」

「ん？まだ寝てるけど。どうかしたの」

「実は・・・」

電話の相手は主人が隊長を勤める皇室護衛、特殊部隊員の紫前類しぜんるい。通称 凶犬 とも 地獄の番犬 とも言われるこの部隊は『歴史に残せそうもない事件の“速やかな”解決』を受け持つ。

そのため隊員は、老若男女問わず優秀であれば引き抜きという形で入隊。

彼、類も銃の腕前を買われ、警察から引き抜かれた。

今回 凶犬 と犬猿の仲である警察との緩衝材として、ある事件の処理に当たっていたが・・・どうにも、問題発生らしい。

彼の事情説明の合間にも、怒鳴り声が割り込んでくる。

「責任者を連れて来い！・・・休日だあ？関係あるか、呼べ」

「すいません・・・ですから、少し待ってくださいと」

「お前らじゃ話にならん。親玉を、銀猫を呼べ」

その荒れ具合に黒は受話器を耳から離し、苦笑していた。

銀猫というのは主人の通り名の一つなのだが、あまり良い意味ではなく「仕事を掠め取っていく、ドロボー猫」という痛烈な皮肉。

しかし主人は、その名をいたく気に入り、もっともらしい後付の理由をどんどん増やしている。

曰く、いつもベルトに挿している鞭が猫の尻尾のようだから、とか。
(ちなみに銀は、主人のやたら長い銀髪を揶揄している)
そして一番その呼称を使うのは、警察。

よく捜査方針で衝突していて、その溝はどんな海溝よりも深い……。

「分かった。四十分でそっちに行くから。うん、後でね」

これ以上は、持ちそうに無いと判断した黒は電話を切った。

一気に脱力しそうになるのを耐え、溜息をつく。

「……ワガママ姫を起こしますか」

「ほら、仕事行くよ！起きなさい」

「うー。今日はお休みなの」

黒の主人、漆黒焰香しゅくくほのかは布団の中で呻いた。

頬を膨らませ、こちらを思いつきり睨んでくる。

その瞳は、人間と異なる深紅。朝日に長い銀髪が煌めいた。

少女の姿形をしてはいるが、瞳と髪の色からも分かるように、あらゆる意味で人間離れしている。

彼女は悪魔との混血一族の中でも有名な、漆黒家の主人。

また、黒も真正銘の悪魔。

とある事情で、何かと敵の多い焰香を護るため、焰香が生まれた時から傍にいる。

その所為か、主従関係なんて物はとつくの昔に無くなっていた。

「誰が勝手に、休暇作ってるの！隊長に休みなんてあるか」

「いーの。私が決めただから」

「何、その私がルール。みたいな論理」

黒の呆れた口調にも、焰香はまったく気にしない。

「当たり前じゃん!」

「イヤ、胸張るトコじゃないから。とにかく後の予定詰まってるし、5分で準備!」

「ええー!!」

黒の一言で、焰香は飛び起きた。

「ごはんは??」

「移動中に食べる」

「やだあー」

「おはよーございます、隊長」

「.....」

不機嫌な焰香は隊員の挨拶を仏頂面で通り過ぎ、そのままソファに倒れこんだ。

「イジけてますねー。今日はまた、一段と」

「杏子か。それがね.....」

書類に目を通す黒と、相変わらず不機嫌な焰香の元へ 凶犬 の制服をかなり着崩した女性が、紅茶を持ってきた。

彼女の名は羽野杏子^{うのあけこ}。

黒髪を肩の所でバツサリ切り、眼鏡をかけて優等生風な雰囲気。

だが、明らかに自分のサイズより大きなコートを羽織って、袖口を何回か折り返し、シャツのボタンもいくつか外している。

凶犬 の制服は黒色を基調とし、「人の命を奪っている事を忘れない」ために喪服のようなデザイン。

紋章は、ケルベロス。

毎年、一般人に覚えられないよう制服が替わるのだが、式典以外は過去のも着用自由という規則で、益々隊員の個性豊かさを周囲に示している。

「なる程。それで、隊長はあんなに機嫌が悪く、不貞腐れていらしゃるんですね」

黒から詳しい説明を受けた杏子は、イジけている焰香をチラリと横目で見た。

「聞こえてるよ」

焰香は無然とした様子で、紅茶を口に運ぶ。

「で、現場の状況は？」

不機嫌そうなお振りだが、その紅の瞳がスツと輝きを放った。

長い脚を組んでいた杏子も、背筋をピンと伸ばす。

「はい。先日捕まった大量殺人犯が過去に、呪術系統の知識に詳しく危険性があると報告を受けていました」

「それをコッチが調べる前に、警察がでしゃばって来たと・・・」

「ええ。家宅捜査をする予定でした。」

それが本日明朝、警察と鉢合わせしたようで向こうが責任者を出せと

手短かつ、簡潔に事情説明をした杏子。完全に事態を把握している。

すると、ソファーに寝転がっていた焰香が口を開いた。

「なら、杏子が行けば？警察の論理、ひっくり返すぐらい簡単ですよ」

「私は現場に向きません。私の武器はあくまで情報ですから」

優秀なハッカーである杏子は、現場でなく机上で隊をサポートするのが仕事だ。

それは焰香も理解している筈だが、どうやら休日出勤がまだ気に入らないらしい。

「なら・・・他に、例えば」

「因みに！翠川は、盗品など裏のルートを。涼木は古美術商、葉金は交友関係を当たってます。」

他の人員は別件です。人手不足のため、隊長にもご足労頂きました。有無を言わせない口調で杏子が告げると焰香もやっと、諦めたらし

い。

「・・・仕方ないか。行く、黒」

なんとも、手のかかる隊長である。

「休日出勤の特別手当てとか、無いのー?」「無い!」

「今度、申請しよーと」「はいはい」

焰香と黒が言い争いながら、部屋を出るとそれまで背筋を伸ばしていた、杏子はぐったりと机にうつ伏せた。

「あー、もう」

すっかり冷めてしまった紅茶を口にする。

「ーご機嫌ナナメなせいで、エンジンをかけるのに時間がか・な・りかかったわ。」

「帰ってきたら、また機嫌が悪いだらうなあ」

杏子は一人、不機嫌な上司が帰って来たら・・・を考えていた。

「だからあ！素人が触ったら危ないから、コッチを先に入れろって言うてんの」

焰香が着いた途端、現場責任者同士の争いが始まった。

「そんな事して、この前みたいに証拠品を動かされたらコッチが困るんだ!」

「ソッチは犯人捕まえて、取り調べまで終わってるじゃない。コッチは別件捜査」

「煩い！ガキは大人しく、待ってる」「・・・」

その一言で焰香が沈黙した。勝負に白黒ついたと、勝手に思い込んだ警察側はさっさと指示を出している。

「あの・・・」「なに、類」

離れて見物を決め込んでいた、黒と類はもう一步下がった。

「確か、あの言葉って」

「焰香には、禁句だねー」

「ですよね・・・」

「――地雷、踏んだな。」

混血の身体的特徴の中で最も不思議なのは、その成長スピード。何故か人間の半分程のペースでしか、年を取る事が出来ない。そして同じく、混血である焰香も・・・。

「誰が、ガキだった？」

ゆらりと、一見すると力を抜いたようにも見える焰香だが、右手が腰の鞭に伸びていて完全に戦闘態勢に入っている。

のんびり構えていた警察側も、これには焦り出した。当然

「ちよつと、止めてくれよ」

と隊員の二人に押しかけてくる。

顔を見合わせた黒と類は、苦笑しながらも止めに入った。

「後で始末書を書かされるの、イヤだから」

「隊長、一応正規の仕事なんで・・・」

「・・・むう」

不本意そうながらも、焰香は殺気を消した。

ふうと、誰ともなく安堵の溜め息をこぼす。

「全くもう。帰ったら、シフォンケーキ焼いたげるから」

「ホント??」

黒の呆れたような一言で、焰香は完全に機嫌を直した。

「やったあー。早く終わらせて帰る!」

殺気がキラキラとした輝きに変わり、焰香もはしゃいでいる。

あまりの変わり様に、警察関係者と共に類も驚いた。

「なんか、やっぱ子供みたい・・・」

そう言ってしまったから、慌てて口を抑えたが、既に手遅れ。

そーと焰香の方を見ると・・・。

「るい君??」

ニッコリと凶悪そうな笑顔を浮かべ、じわりじわりと迫って来ている。

「――非捕食動物の気持ちが、今わかった。

鋭い眼光にビビりながらも

「さて、仕事仕事」

と無理にテンションを上げる類を見、そして今日一番に殺気立つ主人を見て黒は

「――何、やってんだか。

呆れながら片手で、顔を覆った。

「疲れたー」

「お疲れ様です。黒様は？」

「直帰」

朝と同じように、焰香はソファーにダイブした。

既に太陽は傾き、柔らかなオレンジの光を放っている。

それでも今日の仕事は終わらない、が焰香は上機嫌だった。

ルンルンと、脚をバタつかせている。

仕事も上手くいったようだ。

「えーと、呪術関係の知識は、やっぱりネットの可能性が高いみたい。黒魔術とかのトラップが、かなりあったけど書籍はそんなに無かった。

パソコン3台あったから、一応押収して・・・後で中調べといてね」

焰香からついでにと、犯人が使用してそうなサイトの一覧をもらった杏子は、直ぐにパソコンに向かった。

「本当、最近は素人に黒魔術を教える輩が増えましたね」

「そーねえ。ズブの素人さんばっか」

カタカタと作業しながら、ご機嫌な焰香に話しかける。

「そー言えば、隊長？何か良いことあったんですか」

すると、焰香は屈託の無い笑顔を浮かべた。

「シフォンケーキ」

「シフォンケーキ」

杏子の手が一瞬、止まった。

「は？シフォン・・・」

意味が分からない杏子に構わず、焰香はウン！と何度か頷く。

「そ。黒がお家で焼いて待ってるの。だから・・・ね、杏子？後宜しく！」

じゃあねえ

焰香は、いつの間にか帰る準備をしてあっという間に、ドアの向こうへ姿を消した。

一人残された杏子はその呆気無さに、数秒ポカンとした後、口許を緩めた。

「・・・やっぱり、隊長の扱いが上手なのは黒隊長か。」

漆黒家の屋敷にて。

「ちよつと焰香！ソレは明日、隊員達に持って行くぶんツ！！」

「んー？もう食べちゃった」

「もうワンホール、食ったでしょ！」

「いーじゃん。明日焼けば」

「じゃあ、誰かさんの朝食は抜き！」「えええー！」

不機嫌な上司の扱い方（後書き）

最後まで読んで頂き、誠に光栄です。
もう暫し、お付き合い下さい。

はじめまして。こんな感じで小説を書いています。
ケータイとPCの場合を考え、文章を途中で段落変え。という事を
してませんので、少々読みづらいかもです。

あんまり隊員との絡みがありませんでしたが、雰囲気は伝わった。
・・・かな？

一番気を付けてるのは焰香と黒、二人の関係。

親友で恋人のような家族、コレがありきたりなのに案外、難しい・・・

。。これ以上は発展しないしね。

今回は、隊員とのドタバタが書けると良いなと思ってます。

拙い文章でしょうが、読んで頂きありがとうございます。

後学のためにも、感想批評を頂けると幸いです。

月の下で

「おい、あれじゃないか・・・噂の」

「ちよつと俺、好みかも」

「止めとけよ。傍の男、どう見ても一般人じゃないだろ」

様々な身分の人々が集う、パーティ。

そんな場に、もはや陰口と呼べないほど露骨な空気が流れていた。

「あれって、混血でしょ？」

「ウソー。道理で・・・」

渦中の少女はそんな言葉に見向きもせず、黙ってワイン片手に微笑している。

しかし永い間、少女の使い魔をしている黒はその微笑が冷たいモノであると気付いていた。

艶やかなその顔を彩る、紅い瞳の流し目は普段より鋭く凄みのある睨みになり、殺気と共に黒へ刺さる。

『だから、来たくないって言ったのに！！』

——完璧に、キレてる。まあ、まだこれくらいなら想定内だな。視線でチクチクと殺される前にと、主人と距離を取って小さく溜め息をついた。

今日は、この国の女王の誕生日。

国を挙げての祝日となる。

何かを起こすには、もってこいの日だ。例えば・・・テロとか。

それを防ぐために着飾った人々の中、奇抜な軍服を纏った者達が静かな存在感を放ちながら混じっていた。

黒色で統一された軍服。

光沢のある絹のシャツに、頑丈そうな編み上げブーツ。

飾りボタンには、全てケルベロスの紋が入っている。

皇室護衛、特殊部隊<凶犬>。

『騎士団』に所属しているものの、女王直轄の部隊のため、表業務など普段はあり得ないのだが”直属の上司” たつての希望でこのパーティー会場に配置されている。

「あーもう！もつと、楽しい現場がいい。ドタバタ、グサツ的な」

「はいはい、効果音入れないの」

いい具合に酔いが回ってきたらしい。

多少は、殺気立っていた雰囲気や和らいだ。そこへ・・・

「ほのか！」

今日の主役がすぐ側まで来ていた。

「やっぱり、紺のストライプシャツで正解ね。私のドレスと色、合わせたのよ？お揃い」

「叔母サマ・・・」

このハイテンションな女性、詩織が焰香ほのかの叔母であり、国の統治者。皇族も古くから続く、混血の一族である。

詩織の姉、香織が焰香の母親にあたるが、除籍処分となったために焰香の存在は正式には認められていない。

しかし詩織は、姪の焰香を小さい頃から可愛いがっていた。

しかも<凶犬>の制服は、全て詩織のデザイン。

あまりに自分の趣味に走り過ぎ、困る事が多いが・・・。

「今度の制服はコートをやめて、なめし皮のジャケットなんてどう??？」

「ダメですって。・・・それより黒？」

「わかってるよ」

焰香の問い掛けで、黒は人混みの中へ消える。

「何か・・・あつたの？」

「いえ。ただの迷子さん回収です」

焰香はそう笑って、持っていたグラスを空けた。

「さて・・・」

「こっちはOKです」

「了解、任せたよ」

隊員達とこまめに連絡を取り合う黒は、空部屋で見取り図を広げていた。

重要人物のパーティとくれば、来賓も豪華だ。誰が狙われても、おかしくない。

「建物外に、百人程度の傭兵か・・・すぐ片がつくな」

何百人もの命を、三十人足らずの>凶犬くが守る事になる。

元々、皇室護衛は”タテマエ”で普段は、歴史に残せない事柄の処理が仕事だから、まあ慣れた物だ。

「できれば、やりたくないけどね」

見取り図を頭に叩き込み、後ろを振り返った。

そこには先程、パーティ会場で捕まえたテロリストが一人拘束されている。

「どう、話す気になった？」

「く・・・」

「口を割りそうに無いか・・・」

悠然と笑みを浮かべ、机に腰掛けた。

「悪魔の拷問はキツイよ」

スツと、そちらに手を伸ばすと

「ー黒、聴こえてる？」

突然、無線が入り黒は手を止めた。

「ーいいトコだったのに、まったく焰香は！」

「聴こえてるよ！」

不機嫌な声で応答すると、そんな事はお構い無しに

「ゴメン、お楽しみ中？ねー、前線に行っても良いでしょー」

とても軽い口調で焰香が訊く。

少し上機嫌なのは、ワインが手助けしているせいかな。
しかし、前線といえは戦場と同じ。

「絶対ダメ、酔ってるでしょ。それに警護は？」

「んー？他に『騎士団』の人、居たから任せた」

隊長の勝手な行動に、黒は思わず顔を覆った。

「ーっつとに、この人は！！」

「どこ所属？」

「・・・>グリフォンくだったかな」

>凶犬くとよく、チーム編成するからまず問題はないだろう。

それに焰香が我慢できるとも、思えない・・・。

気の進まないまま、黒は口を開く。

「ー無茶はしない、ケガは最小限。それと・・・」「部下は護
る、わかってるって」

行ってきたまーす。という不自然なほど明るい声で、無線は切れた。

部屋にはまた、重苦しい沈黙が戻る。

「・・・遊んでる暇、なくなったから。気絶しないでよ？」

無線を切った焰香は、少し顔をしかめた。

心配する黒に嘘をつくのは、やはり気まずい。

「ゴメンねー、もう戦場に居るんだ」「隊長、後ろツ！」「ハイハ
イ」

体を捻った反動を利用して、鞭を振るう。

背後の銃口を、軽々避けた。

「黒様に、ちゃんとOKもらいました？」「もらったって！」

敵味方入り乱れる中、大声で怒鳴りながらも隊員の位置を常に確認
する。

「大分、人数は減ったね」

立っている敵は、隊員より少ない。

他の場所も山場は超えたようだ。

「まあ、たつた百人ですから」

息切れしながらも笑いあっている、類に無線が入った。

「黒隊長、はい。・・・今のところ、ええ。分かりました」

「なんて？」

類と背中合わせで、伝令を聞く。

「それが、混血が交ざってるらしいから気を付ける。と・・・」

混血とはあまり、よろしく無い。

混血といえは悪魔、もしくは混血の血肉を自らの糧とする。早い話、共食いだ。

特に焰香の場合、混血種の中でも有名な漆黒と皇族の血を引く、純血に近いかなり特殊な混血。

身柄は勿論、血一滴でさえも賞金首扱いされている。

それを知る類は、不安そうに焰香を窺った。本当に頼りになる部下だ。

「大丈夫、失敗しないって！」

につこり微笑み返したが、この酔いが回った状態で混血の相手は厳しい。

「ーああ、ワインはまずかったな。

後悔するにはもう、遅すぎた。

仕方ない・・・類達は退避させるか。

「3人共、黒に知らせに行つて」

「ですが、隊長ー！」

最悪とも言えるこの状況に焰香だけ残せないと皆、首を振る。

それでも焰香は譲らなかつた。

「ーい？私と残ると邪魔だから、命令してるの。すぐ、黒を呼んで」

有無を言わせぬ口調に、隊員は従うしかなかった。

例え、その言葉の裏に気付いても。

「わかりました。ただ・・・無茶はしないでください」

一礼し、部下達が姿を消した後、焰香は苦笑した。

「――なんで隊長なのに、皆から心配されてるんだろ？そんな信用、無い??」

「相変わらず、怖い女だねー」

「いえいえ、黒隊長の尋問ほどではー」

黒と隊員の杏子は、ほのぼのと黒い会話を楽しんでいた。

「ネットって怖いねー。劇薬も簡単に手に入るなんて」「怖いですねえー」

優秀なハッカーである杏子は、<凶犬>の違法な武器調達にも、一役買っている。

特に、珍しい毒薬は杏子の十八番だ。

そこへ、扉がバンツと激しく開いた。

「黒補佐！隊長が・・・」

黒は、反射で武器を構えた隊員を制し、類達に歩み寄った。

「どうした？」

「隊長が・・・すぐ来てくれ、との事です。かなり、マズイ状況かと」

ああ、やっぱりあの子は・・・。

その伝言に思わず、頭を抱えそうになった。

自分といれば、部下の方が危ないと考えたのだろう。

「分かった、すぐ行く。じゃ杏子、後頼んだよ」

杏子なら情報を正確に判断できる分、指揮を任せて大丈夫だ。

黒は深く息をつき、部屋を出た。

「――迎えに行きますか。」

「殺すな、価値が下がる」

「漆黒の生き残りか・・・」

キラリと光る、欲に満ちた瞳。

「――これだから嫌なんだ。混血の相手は。」

「ごめん黒。約束、守れないみたい」

多少の無茶も、大目に見てくれる・・・ハズ。ま、死ななきゃ良いんだよ

一応、言い訳を考えながらも敵の殲滅に集中した。

悪魔の血が興奮で沸き立つのが分かる。

こうなってしまうと、止められるのは黒ぐらいだ。

やはり類達を逃がして良かったと今更、胸を撫で下ろす。

「いつでも、どーぞ？」

凶悪な笑顔で焰香は鞭を構えた。

「ったく！」

黒は辺りに香る血の臭いに、顔をしかめた。

間違えようの無い、焰香の匂い。

「怪我したな・・・」

急いで匂いの方へ駆けつけると、そこは地獄絵図となっていた。

最早、人間の姿形をしていない混血と、おびただしい血。

焰香も、脇腹と腕に切り傷を受けていた。

「無茶して・・・」

上級悪魔の黒が現れた事で、敵も警戒し一時、戦闘が止まった。

その合間に焰香は、黒を振り返る。

「あ、黒！来てくれたの」

ニコツと笑う焰香は、自分の状態に気付いていないようだ。

「焰香」

静かに黒が声をかけると、ん？と可愛いらしく首をかしげる。

「怖い顔して、どうしたの？」

「・・・自分の体、見てごらん」

黒の怒っている理由が分からない焰香は、自分の体を改めて見直し

た。

「・・・あり？」

脇腹や腕の血が伝って、足元に池を作っている。

「そーいえば、体がフラフラする、かな？」

「かな？じゃないッ。何やってんの！つて、焰香！？」

ぐらりと、傾く焰香をすぐに抱き抱えた。

「アハ、血が足りないみたい」

「当たり前でしょ。大人しくしてな！」

黒の登場で気が緩んだのかそのまま、くたりと焰香は意識を無くした。

「無理するから・・・」

黒は片手で焰香を優しく抱き、傷に障らないよう立ち上がった。

余裕の態度に、混血達は威嚇しか出来ない。

じわりと、辺りに重苦しい殺気が充満していく。

耐えきれなくなった一人が、跳びかかった瞬間、絶命した。

驚くほど、呆気なく。

「おいおい、こんなクズ共に怪我したのか？この人は」

片手が塞がっている状態の黒は、返り血を浴びる事なく、ただ大きな溜め息をついた。

あまりにも歴然とした力の差に、混血側が動けずにいると、空気を裂くような音と共に仲間がバタバタと倒れていく。

狙撃に気付き、身を引こうとしても既に遅く、銀の弾丸が体を貫いた。

「お、良いタイミング。類も腕、上げたね」

「ーあとは、大丈夫だな。」

もう混血など眼中にない黒は、焰香を横抱きにすると銃弾の雨を気にせず、悠然と戦場から遠ざかった。

「殲滅完了しました」

「ご苦労様」

「殲滅完了を確認しました」

「お疲れー」

黒は、次々と上がる報告を副隊長として捌いていく。

『お片付け』も、パーティがお開きになる12時までには終わらせた。今回は余裕をもって無事、任務完了としたかったのだが、隊長の焔香の意識が戻らない。

「毒でも入ったのでしょうか？」

「かなりの出血だし・・・」

隊員達も自分そっちのけで甲斐甲斐しく、焔香の世話をしていたが時間も時間なので解散させた。

最後まで残った黒は眠り続ける焔香を抱き上げ、視界の隅に入った影を一瞥する。

「また、手の込んだ事をしてくれましたね」

影は答えない。それでも黒は、言葉を続ける。

「貴方に焔香は、渡しませんよ」

月光に照らされて、その影は静かに口の端を歪めた。

「さあ？どうかな」

その一言に黒は、低く唸る。

「下らない事を言っていると、貴方でも殺しますよ？」

殺気だった黒の声に焔香の瞼が動き、目を離れた一瞬で影は消え失せていた。

思わず悪魔に戻りかけ、牙がのびるのが分かる。

「臆病者が」

「・・・黒？」

ようやく 焔香が目を覚ました。

無邪気にくしゃりと笑い、首をかしげる。

「怒ってるー？」

「酔ってるね」

ニヤハ。と笑って甘えてくる主人を優しく抱き抱えた。

怒りが沈まっっていくのが分かる。

「――臆病者は、僕か。」

悪魔の返り血で汚れたその姿を見て、やはり月の下でしか生きる事を許されないのだと思った。

しかし、闇を見せたくは無い。

ならば……

「帰って飲み直しますか」

「わーい！」

太陽の下を歩めずとも。

いつまでも貴女の傍ら、淡い月光の世界で。

月の下で（後書き）

この拙い文を最後まで読了、有り難うございます。
もう、暫しお付き合いください。

はい、隊員達との絡み．．．全くありませんでした！
有言”不”実行。一番ダメじゃん。
次は．．．って、予告しといて、またずれたら困るので、予告は
無しです。狼少年、とても良くない。

まあ、若干長いので短編を小出しに、出来れば良いな とは、想っ
てます。

お気に入りも、有り難うございます。
感謝感激、雨霰です。

人魚姫

茹だるような暑さの中、>凶犬<の隊員達は団扇を片手にデスクワ
ークに勤しんでいた。

「暑い．．．」

「煩いわよ、類！さっきから、そればっか。仕事なさい、仕事」
ぐったりとした類の隣で、杏子はカタカタとパソコンにむかう。

「パソコンの前とか、暑いんじゃないの？」

机にうつ伏せたまま、類がモゴモゴと言う。

これがいけなかった。

「暑いわよッ！エアコンが使えないってどーゆー事よ？大体、類ッ
！」

キツと睨まれ、姿勢を慌てて正す。

「は、はい」

「アンタ、この前の雑魚悪魔相手になーんで、しよっぱなから銀の
弾丸を使うの？！お陰で、『騎士団』から経費削減を言い渡される
始末、いくら>凶犬<がクールビズOKでも、35℃。超え、扇風
機無しはキツイわ！！」

あーあ、怒ると熱が上がる。

そう言つて、イライラと団扇を扇ぐ杏子に、類は神妙な面持ちで

「ごもつともです」

と反省するしかなかった。

しかし、>凶犬<に経費削減が言い渡されたのは随分前からの
事。

扇風機が無いのも、ほとんどの仕事が現場に出るため、必要がなか
ったからなのだ。

すると実害を被るのは結局、現場に出ない杏子だけとなる。

「ほんとと『騎士団』の奴等、覚えてなさい。この杏子サマを怒ら

せて、無事で済むと思うな……」

グツと拳を握り、ドス黒いオーラを出す杏子を苦笑しながら見ていた類だが、ふと気付く。

「そーいえば、隊長は？」

ウチの隊長ときたら暑いのはからつきしで、夏が来る度に鬱々となつている。

「隊長はー、執務室」

「やっぱりね……」

「ー引き籠つてらっしやるのか。」

類は報告書をまとめ、立ち上がった。

「八つ当たりされないよーにね」

あながち的はずれでないその言葉に苦笑しながら、隊長室のドアを叩いた。

「隊長、失礼します」

「……」

返事をしないのは、いつもの事なので勝手にドアを開ける。と……

「寒ッ!!」

冷気が通り過ぎ、思わず鳥肌が立った。

「隊長！何度ですか、この部屋ッ」

室温計を見れば10℃。という、とんでもない数値。

部屋の所々置かれた、水の張った桶には花が浮いている。

恐らく元々は氷柱だったのだろうが、すっかり溶けていた。

机に報告書を置いて部屋を見回せば、当人が居ない。

「隊長？」

ふと、ソファーを見ると大きな毛玉が一つ。

まさか、と思い近づく。

「何、やってるんですか……隊長」

がっくりと、肩を落とした。

大きな毛玉はミンクのコートで、くるまった焔香が気持ち良さそうに、眠っている。

「隊長、たいちよー。起きてください．．．」
そつと揺らせば、コートの下から白い肩が覗く。

「ーえ、制服は。」

手と共に思考も止まった時、ドアがガチャリ。と音をたてた。

ノックも無しと、いう事は．．．。

慌てて直立不動の姿勢になる。

「お帰りなさい、副隊長」

一瞬、温度差に身震いをした黒は、固まっている類を見て笑った。

「ああ、午前中に会談があつて。だから、流石の焰香でも疲れたんだらうね。寝かせといて」

にしても、寒いな。

黒が窓を開けると、暑いというより暖かい風が吹き抜けた。

「また、会議ですか」

そつ。と答えて、黒は焰香のコートを剥がした。

「あッ！」

思わず声をあげた類を黒が、不思議そうに見る。

「なに？」

よく見ると、焰香は高価そうなドレスを身に付けていた。

「ーまあ、当たり前か。」

「いくら焰香でも仕事場では、服着てるよ」

クスリ、と笑つて黒はコートを手際良く掛ける。

「ー“仕事場では”つて．．．。」

動揺する類をよそに、目を覚ました焰香。

ヒラヒラした薄い生地ドレスで、まるで人魚のようだ。

「おはよー、類。書類？」

寝惚け眼でコチラを見る焰香に、すっかり毒気を抜かれてしまった。

「は、はい。これデス」

んー。受け取つたは良いが、焰香は重そうに瞼を閉じてしまつ。

「仕方ないな．．．」

黒は苦笑して、焰香の手から書類を取つた。

「色々あったからね。僕がやっつくよ」

「お願いします」

「一礼し、踵を返そうとした類を

「ああ、そうそう」

と、黒が呼び止めた。

「会議で揉めたのは、予算の件でね。焰香がムリヤリ押し通したから。今まで通り自由にして良いよ」

「え、ホントですか!？」

「やっつと、あの灼熱地獄とおさらばだ。」

「――杏子も、少しは機嫌が良くなるハズ……。」

「ありがとうございます」

嬉しい知らせを伝えるため、軽い足取りで類が出ていった。と思ったら

知らせを聞いたらしい杏子が入ってきた。

しかしどうやら、かなり……怒っている。

「隊長、どういう事です?」

「どうしたの」

眠っている焰香に気づき、少し杏子は声のトーンを落とした。

「今のこの時期、>凶犬ウチにこれ以上の予算が降りる可能性は、ゼロでした。それに、会議なんてウソですね」

溜め息をつく黒に、勘の良い部下は益々勢いづく。

「会議に、ドレスは着ないでしょう。何をしたんですか? 隊員わたしたちを連れて行かないなんて、よっぽどでしょう」

ウソをつけない程、まっすぐコチラを見る瞳。

仕方なく、概要だけを話した。

女王命令で政界の重要人物の抹殺。

「これが、意外と難儀でね。……一族皆殺し」

穏やかに、焰香の髪を撫でる黒。

その口調から、手を汚すのは自分だけで良いと思っているのが、ありありと読み取れた。

主人になるべく、汚れ仕事をさせない。という意味。

その意思には隊員達も、焰香同じ様に含まれている。きつと黒と同じで、焰香が隊員にそんな事をさせたくないと思っ
ているからだ。

「じゃあ、その見返りに……」

「そーゆー事。怒らないでやってね？一応、隊長としての考えだから。あ、それと他言無用で。ーーじゃあ、終業の準備よろしく」

「……はい。お疲れ様です」

杏子は静かに一礼し、部屋を後にした。

扉の閉まる音で目を覚ましたのか、体を起こす焰香。

「んー、黒？」

ふわっと、マーメイドドレスの裾が広がった。

「起きたの。って……焰香」

立ち上がろうとして、よろめく焰香を支える。

よほど疲れたのか、歩く事さえまならない。

「あー歩くと、やっぱり痛い」

「まるで……人魚姫だね」

「うー」

からかっても、睨む程度の元気はあるようだ。

ソファーに座らせた焰香の足元に膝をつく。

「ほら、脚伸ばして」

ん。と投げだされた脚を支え、ヒールの高い靴をぬがせた。

「なーんか、昔みたい」

くすくすと撥ったそうに、笑う焰香。

確かにそうだなと思ひ、昔のようにかしずいてみせた。

「ご命令を」

あの頃からすっかり関係性は変わってしまっただが、願う事はただひとつ。

「――例え、黄泉への道でも又は地獄に堕ちようとも、お供致しましよう。」

強がりのアナタが、寂しくないように。それが契約。あの日からずっと、自分は焰香モリの所有物だ。

「じゃあ、おんぶー」

「はいはい」

「――まあ、あと数百年はこのままだろうけど。」

「人魚姫って、本当に泡になったのかなー」

「さあね」

「絶対、人間になった方が幸せなのに……」

「まあ、悪魔も悪くないけどね」

「それで自分を捨てた王子をブスツ？」

「なんで、そうなるの……」

こうやって他愛のない話をして、共に永遠の時を歩めるのなら。対価なんて、要らないと本気で思う僕はきつと……悪魔失格、身の程知らずの罪人だ。

いつか地獄の業火に、身を焼かれるのかもしれない。

この夢のような日々、全てを無かった事にされて……。

そう、泡かえに還った人魚姫のように。

人魚姫（後書き）

はい、現実逃避チユウのため何故か、文章が書きたくなっておりま
す。

題名と、内容がミスマッチ。
今更な話デスが

言っておきますが、焰香と黒は家族、友人であり、恋人（？）みた
いな関係。

しかも、恋人要素は一番少ない。

な・の・に！

このデレ文は、何ッ???

本当に、文が書きたいだけみたいです。もう、一本浮かんでるので、
すぐ上げたいと思っています。

それまで、暫しのお別れを。

毒気が強いのは・・・？

「いやーあの時の類は面白かったなー」

「もうやめてくださいよ、その話は」

珍しく、仕事が早く片付いた>凶犬<の面々は、飲み屋にいた。

隊長の焰香と黒はまだ仕事中で、隊員に早く帰るよう言ったのだが、
こういう事が好きな者達が勝手に集まり、盛り上がっている。

今、酒の肴にしているのは、>凶犬<に採用された時の事。

年若い類は、完全に面白がられていた。

「俺だって、かの有名な特殊部隊員の強烈な毒気に当てられたんです」

「類は、警察からだったな・・・」

「ええ。仕事でかなり参ってた時に」

そう、あの頃は仕事を辞めようとまで、思っていたのだ。

訓練場で、類は引き金を引き続けた。

この間だけ、無心になれる。はずだったのだが。

犯人の命なんかより、人質の安全が第一だ。手段は選ばん！

言っとる意味、分かるな？

人型の目標に、照準を合わせる。

集中しなければ。と思えば思うほど不快な上司の声が、耳にこびりついて離れない。

――何故、俺の指示通りにしない！

お前の腕なら出来ただろう？

ざりつと奥歯を噛み締め、目標の頭、胴に手足、それぞれ急所となり
りそんな場所に撃ち込んだ。

しかし、最後の一発が大きくそれ、長く息を吐く。

柄にもない。何、迷ってるんだ

装備を外していると、パチパチと拍手が聞こえた。

見ると、見た事のない制服に身を包んだ少女が一人。恐らく、地位は自分より上だろう。

拍手の後に、

「うん。及第点かな」

あまり愉快でない言葉も、頂く。

どうやら、最初から見えていたような口振りだ。

「失礼ですが、貴女の肩書きは？」

躊躇いがちな類に対し、少女は愉しそうに笑う。

「はい私、皇室護衛特殊部隊>凶犬<隊長の漆黒焰香ほのかと申します」

長い肩書きに困惑しながら、改めて少女を見直すと、その瞳が紅に輝いている事に気付く。

混血、が部隊長？そんなまさか。

驚きを隠せない類に焰香は、目を細めた。

「ああ、知らないのか。特殊部隊はその隊員の異質さで、凶犬と呼ばれてるの。変わってるからね〜皆。まあ、一番変わってるのは私だけ」

唇を尖らせた焰香の口調は、年相応の物で、とても隊長には見えな
い。

「・・・で、自分に何か御用ですか？」

そう、そんな人物がわざわざ、自分に会いに来る理由が知りたかつた。

及第点の意味も・・・。

怪訝な様子の類が面白いのか、焰香は嬉しそうに微笑む。

「丁度、銃を扱う人が引退しちゃったの」

「はぁ・・・」

何と答えれば良いか、分からないのでとりあえず、頷く。

「それで、ウチの隊に入らない？」

「・・・はぁ!？」

唐突に話が跳んだ。

慌てて口を抑えるが、焰香は気にした様子も無く、資料を捲る。

「だって君、銃の腕前スゴイよね。競技大会に出れば優勝、表彰だつてされてる」

「イヤ、自分は警察の人間ですよ？軍に入隊なんて、今更・・・」
無理だ。といぶかしむ類に焰香は、一枚の書類を差し出す。

「出来るんだよねー、それが。女王直轄の>凶犬くなら」

訊けば、>凶犬くは引き抜きという、形で隊員を集めているらしい。
「引退しちゃった人の方が、君より上手かったから、及第点ってワケ」

書類は、サインするだけのようだが、中身は重い。

「入ったら、出れないって事ですよね？」

「そうそう。戻れなくは無いけど」

返さないよ？

凶悪な笑顔で言われ、決めた。

「サインします」

「やったー」

類がサインしている間、焰香は楽しそうに、はしゃいでいた。

「て、というのが俺の時ですけど」

「類つて、銃の腕だけはいいもんねー」

「”だけ”は、おかしいだろ」

軽く酔っている杏子にからかわれ、言い返す。

「お前は、どうだったんだ？」
すると、

「なんだ類、知らないのか」

「ほんつと、特殊だよね」

「杏子、まだ教えてなかったの？」

皆、何故か笑っていて、その中で杏子は涼しい顔でグラスを傾けて

いる。

「何やったんだ、お前」

やっぱり、何かあると思ったんだ。

「私はただ」

杏子の語った話は、どう考えても正気とは思えないようなモノだった。

次の日。

「失礼します」

「ああ類。もう、そんな時間か」

黒は、隊長室で夜を明かしたらしい。

カーテンを開けると、光が差し込んだ。

「どうかした？」

「はい、杏子の入隊した時の話を聞いたんですが、アレって……」
類の言葉に黒は、事も無げに答えた。

「本当だよ」

「マジですか!？」

そのリアクションに苦笑しながらも、

「かなり省略してるだろうから、最初から話そうか」

黒はその時の様子を、詳しく話始めた。

「あの日」

黒はいつものように、お茶の準備をしていた。

焰香の催促にも「ハイハイ」と、気のない返事をする。

しかし、その視線は鋭く庭の方に向けられていた。

「……動物? いや、違う。」

「焰香、大人しくしててよ」「はい」

キッチンと返事を聞いてから、庭に降り立つ。

いつでも戦えるよう、臨戦態勢で待ち構えていると、現れたのは・

「フー、やっと着いた」

大きなリュックを背負った女性だった。

とりあえず、リュックは危険物が入っている可能性があるため、黒が預かり屋敷内に入れた。

「で、どうやってココまで来たの」

「どうって、山を越えてですけど?」

質問したのはコチラなのに、何故か不思議そうな顔をされた。

しかし、漆黒家は郊外の中でも外れにあり、森や川に囲まれている。

普段使う道も、強固な門で閉ざされているはずだ。

その他の道は、どうしても5日はかかる。

「何日かかった?」

「太陽が2回沈んだから・・・3日ですな」

3日、この女が? 特殊訓練でも受けない限り、無理だ。

何にせよ、焰香に会わせてみないと・・・。

「その女性が杏子だった訳。この後は、たぶん聞いた通りだよ」

「酔っているから、大口たたいてるのかと・・・」

「最後のは、笑えるでしょ?」

「ええ。びっくりしましたよ」

「まあ、それで合格ってのはねえ。焰香も焰香だよ」

クックと、黒は喉を鳴らして笑い続け、類は昨夜の話を思い返した。

その後、杏子は部屋に通されたのだが。

「黒、おっそーい! あ、お客さま? もう、ケーキ無いけど」

バタンツ。

素早くドアを閉めた黒は、深くため息を吐き

「少々、お待ちを」

一礼して、部屋に入っていった。

厚いドアの向こうから、

「さっさと制服着て、ピシッとしなさい！」

という、くぐもった怒鳴り声は聞こえた。

ドアが再び開いたのは、ほんの2、3分後。

「お待たせしました」

室内の調度品も見事だったが、それ以上に部屋の主は優美で、どんな物より目を引いた。

「それで、ご用件は？」

目の前の少女は、微笑む。

「――私が殺そうと刃物を向けても、この笑みは崩れないわね。それだけ少女に、圧倒的な力の差を感じた。

さつき、ケーキを頬張っていた少女と同一人物と思えない程に。

「私、^{うの}羽野杏子と言います。>凶犬<に入隊したいんです」
いきなり本題に入る。

このために、どれだけ苦労したか。

「なぜ？」

「>凶犬<なら、優秀であれば引き抜きという形で入隊できると。あなたがその隊長でしょう？」

少女は微笑み、傍らの青年は鋭い目で探るように見てくる。
どこか不審な点がないか、見極めているのだろう。

「私、ハッカーなんです。警察のブラックリストに載るくらいの」

「ふーん。じゃあ・・・」

次々とされる質問に、淀みなく答える。

裏の情報で、使えそうな物は片っ端から挙げた。

「いかがでしょうか？」

杏子は背筋を伸ばしたまま、返事を待つ。

「んー、他に言う事無い？」

その言葉を聞いて、不合格かも。と思った瞬間、勝手に口が動いて

いた。

暗号かと思った黒は首をかしげているが、焔香の方は驚き

「どうして、ソレを知ってるの？」

口元を覆う。

それを見て、杏子は得意そつに一言。

「勿論、ハッカーですから」

「で、何て言ったんだ？」

杏子の話を聞き終わった類は、尋ねた。

「うーんとね、隊長の・・・スリーサイズ」

「はあ!？」

意外な答えに、啞然とする類。

「ー何だよ、ソレ。」

顔にも出ていたらしい。

「なによ!くだらないって顔ね。スリーサイズなんて、女王のパソコンにしか入ってないのよ!セキュリティ、どんだけ厳しいと思っ
てんの」

グツと拳を握り、力説する杏子に対し、一気にテンションダウンの
類。

「ーこいつは、こーゆー奴だった。」

やっぱり、>凶犬<の隊員は毒気が強過ぎる。

・・・いや、それを束ねる隊長が一番、もしくは黒隊長か。

イヤイヤ、そんな危ない集団を野放しにしてる女王が、一番スゴイ
な。

類が一人納得していると、酔っている杏子に絡まれた。

「ちよつと、聴いてるー?」

「ハイハイ」

「何よ、その返事……ぐー」

「寝るな！酔っぱらい」

「……駄目だ。明日、黒隊長にちゃんと聞こつ。」

毒気が強いのは・・・？（後書き）

少し、時間軸が動いてしまいました。

きつとかなり、読みにくいはず。

すいません。どうしてもこうなってしまうて、自分でもどうかな？
とは、思ったんです。

最後まで、読んで頂きありがとうございます。

次は・・・なんか重たくする予定です。

あくまで予定ですが、乞うご期待???

誓約【1】

「――ああ、眠い。」

焰香は、ひとつ欠伸をする。

隊長室で夜を明かし気付けば黒の姿はなく、残されたメモには

『9時より仕事。二度寝、禁止』

とあったので、仕方なく身支度を済ませる。

「「遅いですよ、隊長！」」

扉を開けると、4、5人の声が見事に重なり響いた。

時計を見ると、8時42分。

確かに少し、遅いかもしれない。

「重役出勤ですか」

杏子の痛烈な皮肉に

「重役だもーん」

焰香は、笑顔を返す。

その無邪気な笑顔を見て、鍵がかかった扉を前にやきもきしていた
隊員達。

安堵とも呆れともつかない、ため息をついた。

「隊長室の鍵、取り外そうかしら・・・」

今日は大事な式典の日。

特殊部隊>凶犬<は、女王護衛のため出席する事になっていた。

「その制服を着てくるように。との事です」

ふと机の上を見ると、真新しい制服が置いてある。

いや、制服らしきモノが。

「――やっぱ、趣味に走り過ぎでしょ。」

溜め息を吐きつつ、配給された制服に袖を通す。

「黒隊長は、既に会場です。後は隊長だけですよ！」

「わかってるよ」

ブーツを手早く履き、鏡を見てリボンタイを締めた。
「じゃ、行こうか」

9時ジャスト。

ファンファーレの合図で式典は始まった。

> 凶犬くの隊員達は皆、黒の指示によって配置に就く。

そして当の黒は、女王の傍らに控えていた。

「今回、心配無いとは思いますが・・・先日『機関』が姿を現しました」

式典の長つたらしい挨拶の合間に、報告を入れる。

「そう・・・まだ研究してるのかしら？」

「恐らくは」

『機関』と呼んでいる組織が何を研究しているかと言えば、混血についてだ。

その驚異の身体能力を応用するため、人体実験も平気で行う。

> 凶犬くの処罰対象だが、実態の分からない組織に限って後ろ盾があるもの。

なかなか、尻尾を掴めなかった。

だが、15年前の”あの事件”によって噂もパツタリと途絶え、潰滅。

そのはずだった。

しかし今『機関』は復活、現に焰香の前にも姿を現している。

よりによって、15年前の当事者の前に。

これは、かなりマズイ状況だ。

「まあ、焰香は問題ないでしょうが」

チラリと見やれば、装飾過多な制服を着込みさつきから不機嫌だ。

制服のデザイナーである詩織への苦言が尽きない。

「まったく、叔母サマ？この服どうにかありませんか。袖のレース

を破かないよう着るだけでも神経、使うんですけど！」

「あら、良いじゃない。ナイフを忍ばすのにピッタリだと隊員さんは、言ってたわよ？」

「・・・声のトーンを落として下さい」

大事な式典の最中なのだが。

注意しながら黒は天を仰いだ。

焰香はそんな様子を、クスクスと笑う。

「はいはい。じゃ、会場外も見て来るね。さっき、なんか不審人物の目撃があつたらしいから。後、よろしく」

さつさと指揮権を黒に任せ、この場を後にした焰香。

そんなのが隊長で、本当に大丈夫か。

黒は、溜め息をつく。

「まったく・・・」

「うふふ、ほのちゃんらしいわ」

「ーこの人も焰香寄りだからな。」

その瞬間、大きな爆発音が響いた。

「第一に、女王の安全を！」

酷い騒ぎの中、>凶犬<のメンバーはしっかりと統率がとれていた。会場の一部が爆破され、辺りに瓦礫が降り注いだものの、死人が出るような規模で無いのが幸いだ。

黒が的確な指揮を取り、女王を避難させ、人命救助を優先する。

一時は、騒然としていた軍部もやっと動き始め、事態は収束に向かった。

怪我人も運ばれてゆき、瓦礫も撤去された会場。

搜索するうち、新たな爆弾が発見され、すぐに処理される。

「どうして、爆発しなかつたんだ？」

「もしくは爆発させなかつたのか・・・」

一応、テロかも知れないし、軍部は責任問題があるため、自由に動ける。凶犬の面々が、事後処理を任されたのだが……。

「そういえば、隊長は？」

これだけの騒ぎになれば、真つ先に飛んでくるはずなのに。

「……さあ？」

皆、一様に首をかしげた。

あの後から、誰も姿を見ていない。

「……おかしい」

「何がです」

ハツと顔をあげる黒。

「これ、は……」

その瞬間、その顔から表情という物が全て消え失せた。

「同じ、だ。15年前と……」

黒はひどく狼狽し、隊員は顔を見合わせる。

「……という事は？」

「拉致……が正しい、かな」

隊員達には、黒がそこまで慌てる理由が分からなかった。

「でも、隊長ですよ？すぐ自力で帰ってきて、遅い！とか言いそう」

隊員の軽口にも、黒はニコリともしない。

ただ、深く溜め息をつく。

「……15年前にそれをやって『機関』を潰滅に追い込んだんだ

よ。表向きは、事故として片付けたけどね」

物知りの杏子が、気付く。

「もしかして、あの爆発事故ですか？研究施設内での実験が原因だった、ていう15年前の」

黒は軽く顎を引いた。

「そう……たった一人で施設のモノ全てを破壊した。だからあの

子は、抵抗なんてしない。いや、するなと言ってあるんだよ」

どこか痛いように、黒は力なく笑う。

「あの時、誓わせたんだ……」

「なんだ、コレ」
焰香の居場所を突き止め、その施設に入った途端、異臭が鼻をついた。

無惨な肉片、壊れた機械。

血の海から裸の足跡が続く。

「焰香！」

微かに薫る、焰香の血の匂いを辿った。

そして、扉を開くと・・・

「遅かったね、黒？」

にこやかに微笑む、焰香が居た。

全身に返り血に染まり、それでも笑顔の焰香。

腕には、注射の後が痛々しく残っているし、足首には痣がいくつも
ある。

「ねえ、お腹すいた！。ここって、どこ??」

どうやら、記憶がずれているらしい。

興味津々といった様子で辺りを見渡す焰香は間違いなく、いつもの
焰香だ。

しかし、状況から見てこの惨状を作ったのも焰香だ。

「――主人に、汚れ仕事をさせるなんて・・・使い魔失格だな。」

自嘲と罪悪感に漬れそうになりながら黒は、誓いを結ぶ。

「焰香、今度から僕が来るまで、大人しくしてて。絶対に迎えに行
くから」

「ん、分かった」

だって黒、悲しそうだもん。

焰香がやさしく微笑み、誓約は成立した。

「そんな訳だから、この場は警察に譲る。女王の安全は、騎士団に任せれば良い。最優先すべきは、焰香の奪還だ」

「了解！」

内心の動揺を隊員達に、知られる訳にはいかない。

そんな物、土気の低下にしかならないからだ。

「……僕の身にもなれ。って、言っても……あの子に分かる訳ないか。」

黒は肩をすくめ空を仰ぐ。

主人の事だ、まず殺される事はない。

しかし、悠長に何らかの手掛かりを探す時間も無い。

待て、と言ったのは自分だ。

誓約までした。

「……だから、迎えに行かないと。」

焰香の手を二度も、汚す訳にはいかない、使い魔として。

続 【2】

誓約【1】（後書き）

短くしよう、しようと思うのに、続く。って、どういう事???
すいません。パスン、パスンと読んでもらいたくて、分ける事とな
りました、ハイ。

重たい話が、書きたい。

何故か？夏だからです！

暑い、苦しい。を、文章に変換。

多分、今しか書けないと思う。

という事ですので、次の話まで少々、お待ちくださいませ。

いつも、ありがとうございます。

誓約【2】

体が、ひどく痛む。

「――ああ、そっか。」

目も眩む明かりの下、焰香は一人納得した。

関節という関節を固定され、身動きすら出来ない状態が続いているのだ。

痛まない訳がない。

「――ああ、失敗したなア……。」

見回りに行った、あの時。

「漆黒家の者ですね」

いきなり後ろを取られた。

「だつたら？」

4、5人に囲まれ、尚も薄く笑みを浮かべる焰香。

「――腕の骨ぐらい折つとくか。」

間合いを取ろうとすると、見せつけるよう押された何かのスイッチ。その途端、爆発音が響いた。

「――え、ウソ。」

一瞬、動きを止めてそちらを見た焰香。

爆発した場所から見て、会場の外に設置された物だろう。

「――あれなら、最悪でも怪我人かな。」

安心すると同時に、不審感が募る。

どうせやるのだったら、会場を爆破ぐらいできる筈だ。

つまり……これは自分に対する切り札。

「抵抗しないで頂きたい。まだ、爆弾は仕掛けてある。まあ、貴女の行動次第だが」

陳腐な言葉だと思った。

だが、凶犬くの隊長として、女王と民衆の安全が第一。

ましてや爆発事故となって、原因が混血にあると知れたら・・・また、一悶着あるだろう。

天高く昇る煙を仰ぎ見る。

自分の身柄を拘束するためだけに、民衆を危険に晒すなど。なんとまあ、高く見られたものだ。

「分かりました。どうぞ・・・お好きに」

はあー。

自分の迂闊さと考えの甘さに、半ば呆れる。

「・・・こうなるとは・・・ね。黒に絶対、怒られる。」

とりあえず、逃げるのはまず無理。

指一本動かせないこの状況に加え、点滴されている薬のせいで、さつきから意識がとびそうだ。

酸素不足で、頭はガンガンするし。

意識を繋ぎ止めようとしていると、電動の扉が空気音と共に開き、そちらに目をやる。

医者のように、白衣を纏った者達がゾロゾロと入ってきた。

「・・・またか・・・」

うんざりした焰香は、また視線をライトに戻す。

拘束されてからというものの、こうやって何時間か置きにコイツらはやって来る。

する事といえは訳のわからないデータを取ったり、薬を打ったり血を抜いたり、はたまた体にメスを入れたり。

とてつもなく、吐き気がする事はばかり。

押さえつけられた腕に、針の感触。

今度は、体に毒を流し込んだらしい。

舌を噛まないようされた、猿轡のせいで呼吸すら苦しいのに、痛みが体を走り抜ける。

「・・・」

呻き声は上げず、ただ睨み付けた。

抵抗はしない。

自分の力は充分、分かっているつもりだ。

混血とは、人間の体に悪魔の血が融合し、一定のバランスが成り立っている者の事。

悪魔の血は人間の体を強化するが、普通は毒だ。

そうになると、混血には通常とは違う誤差が出てくる。

髪、瞳の色の違いなど序の口。

角や尻尾、翼が現れ、人間のそれとは違う者や一部が獣の者などザラだ。

しかし、焰香の場合。

混血同士の子供なので益々、悪魔の血が濃く、致命的な欠陥を持ってしまった。

それは――人間の体で産まれてきた事。

人間の体に、封じられた悪魔。

というのが相応しい程に、体に流れるは悪魔の血。

その分、代償は大きい。

人間の体に不可が懸ければ、それこそ悪魔のような風貌になってしまふ。

しかし、あくまでも人間の体。

聖水が効かなければ、銀の弾丸等も効かない。

なまじ悪魔化しているので体は丈夫ときたら、もうお手上げだ。

倒せる方法が皆無なのだから。

そして当然便利なその血は共食いが基本の悪魔、混血は尚の事、一部の人間すらも欲しがる。

そんな、血で血を洗う争いから焰香を守るための使い魔が黒。

『悪魔が嫌でも寄つて来るし、何より僕が護る意味が無いでしょう？』と、悪魔化するのは禁止。そういう約束だ。

だから、抵抗は・・・しない。

「……ねえ早く、迎えに来てよ。」

「まだ、居場所特定が出来ません！」

「研究施設だけで、かなり……」

「じゃあ全部、調べれば良いじゃないッ」

待機所は怒号が飛びかい、書類は舞い、酷く荒れていた。隊員達は重装備で、部屋を出たり入ったりを繰り返す。

「ただいま、戻りました」

「どうだ？」

「北東地域の施設は、すべて潰しましたが……」

「一つ一つ、白み潰しに行くしかない。」

隊員達は忙しなく、報告をしては次の場所へ。

一方、黒は副隊長として無闇に動く訳にもいかず。

この重大な秘密を、他に知られないよう各関係方面に睨みを利かせ、じつと椅子に留まった。

「杏子、どう？」

「あまり芳しくありません。なにしろ『機関』の持つ施設を搜索する度に、緊張状態が続きますから。隊員にぶっ続けでやらせるのも……」

「言いづらそうに、うつむく杏子。」

「効率が下がるか……」

「ええ」

バレたら処罰モノだが、最善と思われる手を使うしかない。

「わかった。隊員の引き上げを指示、明朝まで休息を摂らせよう」

「でも……」

困ったように、視線を漂わせる杏子。

一刻も早く、隊長を見つけないと。

でも隊員の事も考えたら……。

そんな心境が容易く読めて、黒は口許をフツと緩めた。
「・・・僕が出る」

「あー、瞳孔異常なし。気絶のようだけど脈拍が遅いねえ・・・悪魔って、一時的に仮死状態にもなれるのかな？」

閉じていた瞼を開かれ、ライトを当てられた。
ぼんやりしていた意識が、覚醒する。

毒の効果が激しすぎたのか、途中の意識がプツリ消えている。
確か呼吸が出来なくなつて、かなり悶えた筈だが、猿轡を外されたので幾分かは楽だ。

「次の投与つて、何時間後??」

「1時間後です」

「もう、待てないよ。他、神経作用のヤツ持ってきて」
「ですが・・・ハイ。直ぐに」

ああ、これじゃ完全に実験動物扱いだ。

腕にチクリと痛みが走り、また薬を投与される。
すっかり思考回路が溶けて、普通の状態で保つ事が出来ない。
けれど、悪魔化なんてしたら思う壺。

どうしようか、なんて冷静に思案する自分がいる事に気付き、そつと安堵の溜息を溢した。

「神経作用は効かないか・・・じゃ、次」

「ですが、コレは」

「いーから」

「一応報告しますが、ソレを投与した事によって、ほとんどの実験体が息絶えています」

「へー、そう」

耳に入るのは、淡々とした会話。

もう、なんでも良いよ。

投げやりになつた焰香が、意識を手放そうとしたその瞬間。獣の咆哮が聞こえた気がした。

「――ああ、やっと・・・来たか。」

「なんだ!？」

「分かりませんッ」

「悪魔のようですよ!」

「銀の弾丸が、効かない!」

「そんな・・・上級悪魔か」

周囲の慌てふためく様子をぼんやりと眺め、焰香は微笑を浮かべる。

「黒、だ。ココだよ?」

すっかり掠れた囁き声だったが、ちゃんと聴こえたらしい。

破壊する音が、近付いてくる。

と、鋼鉄製だるう扉が大きくひしゃげ、数人が抑えに走つた。

長く保つ訳がないのに。

安心しきつた焰香は、瞳を閉じた。

扉が弾けたのか轟音が響き、悲鳴が混じりあう。

嵐の中のような、激しさだった。

辺りがようやく静かになつて、黒の溜め息が聞こえた。

「ちゃんと目、閉じてるよ?」

こういう時、黒の姿を決して見てはならない。

小さい時、怖いだろうからと約束し、今でも守っている。

「まったく、何やってんだか」

「あはは、お久しぶり」

掠れた声に黒が一瞬、動きを止めた事まで分かる。

「少し、痛むだけだよ」

「ウソだね・・・で、何それ趣味?」

「ひつどーい。好きで実験体にはならないよ」

荒々しい足音とは違い、拘束具を外す手付きは優しい。

「まだ・・・見ないで」

いつもより低い、抑えた声。

黒に分かるよう焔香は頷き、そつと抱えられても固く目を閉じる。

「少し急ぐから、じつとしてよ」

頭をガードするように腕が回ったかと思えば、何かを乗り越えてガラスの割れる音が続く。

「外にでるから」

ふわつと風が当たり、重力に逆らって浮かぶのが分かった。

バサツと羽ばたく音が、心地良い。

「目、開けてもいい？」

「・・・ちよつと、待って」

黒の体から、少し力が抜けていくのが分かる。

いつもは形すら無い、翼だけ規則正しく動いてはいるが。

「良いよ」

そつと目を開くと、黒の顔がぼやけて見えた。

「どう具合は？」

「あー、まだ薬が抜けてないみたい」

黒の顔が、怖くなったのは見間違いにしておこう。

「・・・すぐ、ベッドに放り込むからね」

「はいはい」

すとな。と、隊長室の窓に降り立った。

「皆、寝てるかな??」

「焔香はじつとしてる」

ソファーに下ろされて、言われた通り大人しくする。が、

「隊長!!」

ドアが激しく音をたてて開き、隊員達が流れ込んできた。

「ーードア、壊れてないかな？」

ドアの心配をする焔香の周りに、隊員達が列をなした。

「お怪我は?!」

「隊長、大丈夫ですか」

「心配したんですよ！」

「ご無事で……」

皆言っている事はバラバラだが、言いたい事は分かったので、焰香は声を張り上げた。

「大丈夫だつて。それより、ちゃんと仕事したの?!」

少し掠れてはいるが、いつもと変わらない焰香の口調に隊員達が安心したのも、束の間。

「そんな訳ないでしょ?!」

黒が呆れた様な声を出し、二人の空気がピリピリしだした。

「大体、隊長とあるうものが人間ごときに拘束だなんて。人の仕事を増やすんじゃない!全く、警察と軍に適当な言い訳、考えなさいよ」

「何それ?コツチだつていきなりスイッチを目の前で押されて爆発。大人しくしろつて言われたんだから!それに言い訳、考えるのは黒の仕事でしょ?!」

段々とヒートアップしていく、口喧嘩。

ハラハラしていた隊員達は、自分達は後でいいかと、一人また一人と出ていく。

最後の一人がドアを閉めた途端、糸が切れたかの様に焰香はソファに突っ伏した。

「うー、具合悪い」

ダラリとした焰香の傍らに、膝をつく黒。

「やっぱり、ウチで休んだ方がいいんじゃない?」

さっきと打って代わり、優しい声音。

隊員達に、心配をかけたくないという焰香の我が儘に付き合ったのだ。

本当は直ぐにでも、家に帰したかったのに。

しかし、焰香は首を振り

「やだ。あと一時間だけ、寝かせて」

そのまま、深い眠りに就いた。

日が高くなりだしたので、黒がカーテンを閉めていると、ノックと共に杏子が入ってきた。

ぐっすり眠っている焔香に、目をやり

「やっぱり」と呟く。

「隊長、かなり無理をしてたんでしょう？・・・勝手ながら、隊員達は一旦帰らせました」

「ーそう。ありがとう」

「それと副隊長、>猟犬<が来たらどう対応を？」

このまま有耶無耶にするつもりだったのに、本当に杏子は目敏い。

黒はそつと、溜め息を溢した。

>猟犬<といえば、軍の中の処罰を取り仕切り>凶犬<と並び怖れられる部隊の事だ。

今回の黒の行動は、言いがかりをつけようとすれば、勝手な解釈が出来てしまう。

特に、黒は“あの”焔香の従者。

聞き出したい事は、数多くあるだろう。

「>猟犬<か・・・まあ、その時に考えるよ。隊員達が引つ張られないように手は打つし、焔香は大丈夫だろうしね」

「ですが・・・」

黒のそんな回答に、杏子は不満気な様子。

流石に、曖昧過ぎたか。

「大丈夫、心配ないよ」

黒は焔香の傍らに立ち、微笑んだ。

「この子から離れると、ろくな事が無いからね」

「そう・・・ですね」

安心するまでいかなない物の、気休め程度にはなった様で、一礼して杏子は出て行った。

「じゃあ、隊員達は10時出勤という事で、連絡を回します」

「よろしく」

一人になり、改めて黒は思った。
「――でも、まあ。遅かれ早かれ、獵犬くが来るのは、明白だな。」

「約3時間後」

「ふぁー、よく寝た……コク、今何じ？」

「ん？9時」

「9時か……って9時！??何で、起こしてくれなかったの。もうッ！」

「普通、一時間で起きないでしょ」

「でも溜め込んだ仕事とか、隊員達の指示とか……」

「隊員達の出勤は、10時」

「……」

「お分かり？」

「なーんだ。もうちょい寝よ」

「朝食、要るんじゃないの？」

「……食べます」

誓約【2】（後書き）

なんか、不完全燃焼・・・。

ま、布石という事にしといて下さい。

評価で共に、5ptをもらったんですが・・・買い被り過ぎじゃない???

いや、嬉しいですが。

厳しい感想とかも、お待ちしてます！

*詩なんかも拙く、書いておりますので、これからも、どうぞ宜しく願います。

君が為の騎士

「ああ！隊長、ダメですって」

「やーだ！」

「大人しくつて言われたでしょう」

「副隊長に怒られるの俺らですよ？」

「んなの、知るかッ」

「あ、グレた・・・」

焰香は、かなりご立腹だった。

いつも以上に荒れる隊長に、宥める隊員。

そんな様子は、溜め息混じりにかけられたこの言葉に、すべて凝縮されている。

「何やってんだ、お前ら・・・」

「いや、隊長が・・・」

「ここの病食、マツズイ!!」

『はあー』

「ーそりゃ、貴女の口に合うワケないですが・・・」

隊員達は、一様に肩を落とした。

呆れた医師は、何も言わない。

焰香は先日の【拉致騒動】で大事を取り、入院を余儀なくされた。普通に仕事をしていたかと思えば、ばったり倒れ、凶犬専用診療所に文字通り収容。

黒と隊員が最後まで拒否し続ける焰香を、無理矢理に入院させた。

そのため、かなり不機嫌なのだ。

通常より3倍ほど。(当社比)

「帰るー!!」

「いやいや、駄目ですって」

そんな焰香と苦勞する隊員を前に、いつもの事だろ。と医者だけは

黙ってその様子を見ていた。

この医者、紺堂も>凶犬<の隊員。

『機関』に属さず、ちゃんとした技術を持つ医師を探し、見つかったのがこの男だった。属に言う、やぶ医者だが。

正規の医師は大抵、自らの研究成果の名声と賞賛を求め自由な（もしくは違法な）研究が出来る『機関』と繋がりを持つ事が多い。

その点、元軍医で診療所を持つ紺堂はやぶ医者でも>凶犬<にとつて、都合が良かったのだ。

「ったく。軍医やつてる時も、混血の治療が一番面倒だったが、お前さんは特にだな」

「紺堂さん!」

「はいはい、隊長さん。ね」

その口の悪さは、よく隊員から咎められているが、焰香はまったく気にしていない。

「別に、好きに呼べばいいんじゃない?」

「いやこれ以上、砕けた雰囲気はダメです」

「そお?」

「そうです!!」

（ケチー）

（ケチじゃなくって常識です。）

（ああ、頭でつかち??）

（隊長!）

ドア越しでも聞こえる、会話。

隊員達は完全に、焰香のおもちゃにされている。

仕方なく、黒が仲裁に入る事となった。

「焰香、それぐらいにしなさい」

声を聞き振り返った焰香は、黒の持つ朝食に目を奪われている。

「せめてご飯くらいは、食べてもらわないとね」

焰香は目を輝かせ、隊員は安堵し、紺堂は胸を押さえた。

「やったー、パンケーキだ」

「き、機嫌が直った」

「胸やけがするぞ・・・」

皆、多種多様の反応をとった。

「いただきます」

黒の紅茶を待った焰香は、キッチンと手を合わせ、いそいそと自分の皿にパンケーキを積み上げていく。

誰も盗らないのだが、ことうするのが好きらしい。

「メープルシロップとジャム、クリームもあるけど？」

「・・・んう」

思いっきり口に詰めているので、返事は曖昧だが

「はいはい、要るのね」

黒は数種類のジャムから、適当にカシスジャムを手に取り、焰香の方へ押しやった。

「今ので分かるんですねー」

隊員達は感嘆の声を上げたが、こんなの出来て当たり前だ。

「ーでなきや、付き合いきれないよ。」

「あ、紅茶注いでやって。多分、ミルク多めのミルクティーだと思う」

これは辛うじて、焰香が頷いたので隊員達にも分かった。

そうして2、3人前は食べただろうか、小山のように積まれたパンケーキは、一枚も残らずなくなった。

「おーい、もういいか？」

病人とは思えない食べっぷりに、紺堂はただただ呆れている。

「普通は、検査前にメシ食わねえんだぞ」

「だから病人じゃないって言ってるじゃん！」

不満気に焰香は、睨みつけた。

全然、納得できないらしい。

「あんだだけ派手にぶっ倒れて、何言ってるんですか！」

「もう、へーきだつて」

大袈裟な・・・と不貞腐れる焰香に、静かに黒が歩み寄った。

「ーまったく。バレてないとでも？」

そのまま病院服の上から、腕を掴む。

「・・・」

一瞬だが、焰香が身を竦めたのは見間違えようがない。

「何？」

それでも、とぼけたように首をかしげる焰香の腕を黙って露にする。そこは、包帯の上からでも分かるほど、痣と注射の所為で腫れあがつていた。

隊員達は、見えなかったその怪我に息を飲み、焰香といえば、苦虫を噛んだような表情になっていた。

視線をさ迷わせる焰香に、黒はため息をこぼす。

「これで、へーきつて？」

「あーコレは・・・」

焰香は乾いた笑顔でペラペラと、言い訳を捲し立てた。

あはは。まさか、こんなに腫れるなんて。知らなかったあー！

「はい、ウン」

冷静な黒の言葉に、がっくり肩を落とす焰香。

どう考えたってバレバレの嘘だ。

「こんなに腫れると、熱をもつんだよ。ふつう、ね」

隊員達の顔色がサツと変わった。

「まさか隊長、放って置いたんですか？」

「冷やさなきゃダメですよ」

「化膿したら、どうするんですか」

耳が痛くなる程、非難され続けた焰香はとうとう拗ねた。

「もう、分かったつてば！検査するんでしょ？」

完全に、不機嫌モードに入ってしまったようだ。

一人でスタスタと部屋を後にしたので、慌てて隊員達が追いかけていく。

残された、紺堂と黒。・・・と
そう言えば。紺堂が唐突に切り出した。

「手続き踏まずに単独行動したらしいな・・・」

「まあねー」

いい加減聞き飽きたが、適当な事を返す訳にもいかない。

「別に、軍に忠誠を誓った訳でもないし、焰香の安全が第一。バレたら・・・バレた時でしょ」

「ほおー殊勝な事で。けどよ、アンタが拘束されたらその間、あの子はどうなる？」

紺堂の鋭い目が、黒を射抜いた。

「今、只でさえあの子は消耗してる。本人に自覚は無いようだが、薬の影響が激しいんだ。神経から筋肉まで損傷、体力だって落ちてる。一人じゃ外にも出せられねえぞ。そんなのを狼達の前に放り出すつもりか？」

黒は大きく息を吐き、頷く。

隊員の誰もが気付いていなかったが、焰香はあれで結構ギリギリの体調だ。

さすが医者と内心舌を巻くが、まだまだ甘い。

「そんな事、分かってるよ」

「なら・・・」

「だから、そのための>凶犬くだ」

黒は口元を歪めた。

普段想像出来ない程、なんとも悪魔らしい笑顔。

「女王を護る？そんな雑用なんか、『騎士団』に任せれば良い。>凶犬くは元々、迫害を受けた混血の集まりだった。それを優秀な人間を集め、大きくしたのが先代の漆黒家当主。その理由分かる？」

「さあーな」

「勿論、一人娘の焰香のため。女王なんてのは二の次さ」

紺堂は目の前の悪魔を見て、胡散臭そうに目を細めた。

「おいおい、そんなぶっつけて良いのかよ」

紺堂が呆れた声で問うと、黒は喉を鳴らして笑った。

「>凶犬くに入った時点で、隊員は焰香のための騎士としての契約を結んでるよ。だから言ったでしょう？」入ったら、出られない地獄の番犬』だと。一番最初に、ね」

「――悪魔って、恐ええ。」

口の端を吊り上げた黒に、紺堂が若干引き気味なのに気付いたらしい。

黒はさっきまでの笑顔を消し、いつもの様に苦笑した。

「まあ、焰香が望まない限りそんな無粋なコト、僕の一存じゃ出来ないけどね・・・簡単には」

「その簡単には、って言えるのが恐えんだって」

「――反乱分子と思われるぞ。」

「――>獵犬くにはバレたら、そうなるねえ。」

二人は、呑気な会話を続けていたが

「紺堂さん、来てください！隊長が

・・・」

隊員の叫び声に気付き、声のする方へ急いで向かった。

「どっした？！」

診察室に入ると、隊員が焰香を抱え支えていた。

どうも、ぐったりとしている。

「いきなり、倒れて・・・意識はあるようですが」

隊員の説明の合間にも、紺堂は脈拍を測ったり体温を見たり。

忙しく動き回り、焰香を診察台に乗せるよう指示した。

すると、嫌だと焰香がもがく。

隊員からも逃げようとするので、黒が交代し腕の中に困った。

途端に、落ち着きを取り戻す焰香。

「なんで」

「まあまあ、落ち込むなよ」

「・・・おい、そこ静かにしてろ」

焰香に嫌がられ、落ち込み慰め合う隊員達はこの際、無視。

「オイオイ、まさか悪魔化するんじゃないかねえか？体温が上がってるし、体調も万全とは言えねえ。自分が危機的状況にあると判断して意思とは関係無く、悪魔の血が騒いでるんだろ？」
どうする？

紺堂は黒の指示を仰いだ。

恐らく、紺堂の診断は完璧だ。

だからこそ悪魔化したら、を考えて焰香は隊員から離れるようにしたのだから。

そういう事だけは気にする人だから。

「つう……」

苦しそうにもがく焰香を抑え込みながら、黒は冷静に判断を下した。

「悪魔化させるしかない。これ以上、抑えるのは正直ムリだ」

焰香の爪が次第に伸びていくのを見て、黒はもう時間が無いと悟り、紺堂に視線で合図を送った。

「おい、聞いたか？お前達、出て行かねえと」

「出て行きません！」

「はあああ??！」

焦ったのは、黒と紺堂だ。

「イヤ、危ないって」

「おいおい、怪我すんぞ。隊長が苦しんでるのが分かるだろ！」

しかし、隊員達は動く気配がない。

むしろ目が据わっている。

「だから、です！」

「隊長の無茶を目に焼き付けて、次に活かすのが隊員したっぱの役目でしょうっ?！」

その言葉に、焰香からも力が抜けた。

「……お互い様だねえ。」

「じゃあ、そこから動くんじゃないよ」

「はい！」

焰香から手を離すと、爪が伸び、紅の瞳が爛々と輝きだす。

服を突き破り、真っ黒な翼が広がると辺りに羽根が散らばった。あまりの荘厳さに隊員達は絶句。

墮天使と言われれば、そうなのかと納得するぐらいに美しい。しかしその美しさは天使と違い、人を誘惑する為の物。まさに、悪魔の姿だ。

焰香は診察台を一瞥すると、その上に陣取った。

バサツと漆黒の翼が広がったと思えば、鎧のように焰香を覆い隠す。

「当然、そのままだよ」

心配そうに、焰香を窺う隊員達に此方へ来るよう手招きする。

「そのまま放っておけば、勝手に回復するから」

そう促しても、動こうとしない隊員の耳元で黒は、意地悪く囁いた。

「喰われるよ？」

ええっ！！とそれまでぼーとしていた隊員達がたじろぐ。

「喰われるって・・・」

隊員の不安を感じ取ったのか、煩かったのか焰香が翼を持ち上げ顔を覗かせた。

漆黒の翼から爛々と輝く、紅の瞳。

「食べるわけではないでしょ！！」

「あ、ですよー」

「ーかなりご立腹なのは分かりますが、その貌で怒られると・・・マジで恐いっす。」

隊員の動揺には気付かず、満足した焰香はまた丸くなった。

「遊んでねえで行くぞ。患者の邪魔だ」

「睡眠を摂れば、多少は回復するから放っておくのが一番だよ」

焰香を一人つきりにし、黒は診察室に鍵をかけた。

「鍵、掛けるんですか？」

「ああ。かなり危ないからね。焰香の寝起き、立ち会いたい？」

「いえ！むしろ全力でお断りです」

首をぶんぶん振る隊員達は、微笑ましい限りだ。

「にしても、いやーお前ら見直したぞ？」

バンバンと、隊員2人の肩を叩く紺堂。

「まさか、あの状況で”下っ端”宣言とは大したもんだ」

紺堂は、兄貴分みたいな所があるから、この2人も紺堂を慕っているのか。

「なんですか！、紺堂さん」

「別に、深い意味は無いですよ」

改めて言われると照れるのか、2人はすごい勢いで紺堂に噛みついた。

「でも、本当にあの場面であの台詞が聞けるとはね……」

「黒隊長まで！」

「あんな話、した後だったからなあ」

紺堂も感慨深い物があるらしい。

首をかしげる隊員達に、黒は向き直った。

「その覚悟、揺るぐ事は無い？」

黒の言葉の意味を全て理解した訳ではないだろうが、まっすぐ見詰める瞳に曇りは一点も、見当たらなかつた。

「はい！」「一生、下っ端で構いません」

「……これなら、焰香を任せられる。」

「……立派な騎士達だな」

同じ事を紺堂も考えていたのか。

「ああ、全くだよ……」

「反乱も簡単かもねー」

「おいおい。洒落にならん」

「冗談」

「悪魔が冗談、言つなー！！」

「ねえ黒、お腹空いたー」

「隊長!?!」

「復活、はやッ!?!」

「焔香、せめて翼は閉じなさい・・・」

君が為の騎士（後書き）

題名、おかしい！けど他にどれ、クローズアップするよ？？
という事になり・・・。
うん、まあスルーでよろしく

で、本題ですが

黒って、実は物凄い悪魔なんです。

焰香相手にドタバタしてるのが、不釣り合いつていうか、あり得ないぐらいの。

だからこそ、甘やかすんでしょうが。

他には、興味無し！

焰香が大切にするなら、自分も大事にしましょう。っていう感じ。

まあ、隊員には完全に情が移ってるみたいです。（みたって、作者としてどうなんだろう??）

そんな、悪魔な黒の怖いトコが書きたかっただけです。

力入れ過ぎで、更新も鈍足に・・・。

気付けばもう秋です。

夏祭りも、まだ書いてないのに！！

嗚呼、時間ってなんで止まらないんだ。

最後まで、拙い文を読んで頂きありがとうございました。

君が為の騎士【後日談】

「うー暇だ。ヒマヒマヒマ」

未だ体調が戻らない焰香は、ベッドから出る事さえ許されていない。痛む体で少し起き上がり、片膝を抱え込み思案する。

「うーどうしよっか。」

黒は隊長の代役として出て行ってしまったし、隊員達も応援要請で狩り出されている今が、病室を抜け出すチャンスだ！

「おーい、隊長。差し入れた・・・って何してる？」

「いや、別に！！」

たった今、窓から脱出作戦のためにシーツを裂こうとした手を隠す。紺堂に動揺を悟られぬよう、ベッドに横になった。

「どーせ、片腕がまだ動かないだろ」

行動を見透かされたようで、面白くない。

むくれる焰香の前にまだ湯気のたつ紅茶が置かれた。

透き通った薄いグリーンハーブティー。

思わず顔を上げると、紺堂が苦笑混じりで綺麗な箱が差し出す。

「機嫌が悪くなったら、出せって言われたんだがな」

可愛いらしい書体で、有名なお菓子店の名が書かれている。

これは確か、数時間並ばなければ買えない人気店のハズ。

「いつ買ったんだか・・・」

思いがけないプレゼントに口元が綻んだ。

「えーと、マカロンにクッキー、フルーツの砂糖漬け。あ、下の段もある」

宝石のような菓子を前に、焰香の機嫌も直ったようで、紺堂はそっと息をつく。

フルーツの砂糖漬をつまみ、美味しそうに指まで舐める様は、またタビに酔う猫のよう。

満足そうに目を細め、紅茶のカップに口付けたのを確認。

「ーよし、飲んだな。」

「ここから、紺堂の重大ミツシヨンの始まりだ。」

「その貰い物の紅茶どうだった？」

「ん？フツーに美味しいけど」

首をかしげ、空になったカップを見せる焰香に多少の罪悪感が湧くが仕方ない。

「う・・・？眠い」

「まあ、ハーブティーはリラックス効果があるしな」

瞼をこする焰香の前から、素早く菓子と紅茶を取り上げベッドを整えてやる。

「寝た方が回復が早まる。これは医者のお言だった事、忘れんなよ」
まっすぐその眠そうな目を見つめると、あっさり焰香は頷いた。

「ん、そうねー。お休み」

そのままボタンと倒れたかと思えば、くうーと寝息をたて始める。

「ー寝た、か？」

あまりに早い反応に、脈拍を確認してはあー。と安堵の溜め息をつく紺堂。

ポケットから細長い小瓶を取り出す。

「睡眠導入剤・・・つてのは、ちよつと姑息じゃねえか？」

「やっぱり、これだけ無防備に眠られると罪悪感が残るんだが。」

しかも、これからする事はハッキリ焰香が嫌う事。

「ーああ、気が重い。」

紺堂が溜め息をつくとき・・・

「仕方ないでしょ。そうでもしなきゃ、大人しくしないし」

窓からフツと現れたのは、この任務を依頼した黒。

少し前から、焰香が完全に眠った頃合いを見計らっていたようだ。

「手のかかる隊長だこつた」

「いーから、早く済ませよう。起きたら面倒」

「ああ。そつち抑えてくれ」

紺堂は、何も知らずに眠る焰香の腕を持ち上げると、柔らかい布で

拭きあげた。

そしてじわじわと右手に持った針を埋め込んでいく。

「ん……う」

微かに呻き、焰香が顔をしかめただけで、コッチは冷や汗モノだ。針が完全に入るまで、絶対起こす訳には、いかない。

「まだ？」

「あと少し……よし、入った！」

針が出ないようテープで留めれば、任務完了。

強ばっていた肩の力が抜けていく。

「ったく……たかが点滴ごときで、なーんでこんな苦労してんだか」

「ほんと。お菓子はへーきで食べる癖に、ご飯ムリって……」

まあ、あんなに喜んでいながらも、口に運んだのはたった2つだった。

思った以上に体調は、良くないらしい。

「点滴嫌いっていうより、注射嫌いなんだろうな。やっぱ、トラウマか……」

焰香の陶磁のように白い腕にはまだ、この間の痣がうつすらと残っている。

「だろうね。小さい頃は、これ以上に無防備で……何度、探し回った事か。動くなって言った側から、目を離したら居ないのが普通知らない人に付いていくなかって言っても、平気で付いてく。最近だよ？お菓子里に釣られなくなったのって」

怒った口調に似合わず、黒の瞳はひどく優しい色をしていた。

「毎回義務的に迎えに行くとは必ず、待ってた。なんて笑顔で言うんだよ……契約しただけの悪魔に。もう、その頃から僕は焰香に甘かったな」

眠る主人の傍らで、柔らかく微笑む悪魔。

その変わった主従関係に、名前を付けるとしたら……。

いや、そんなの部外者である俺が、言う事じゃないか。

紺堂は、皮肉っぽく口許を歪めた。

「隊員達を騎士なんて呼ぶが、お前の方がよっぽど、中世の騎士みてえ」

「悪魔が騎士ねえ・・・絶対、似合わないよ」

紺堂の言葉に、黒はただ可笑しそうに笑った。

しかし、黒というこの悪魔。

契約を結んだ、ただの主人をここまで甘やかし、迷わず自らを犠牲にするその姿勢。

そして、絶対の忠誠心。

正に他の為には動かない従順な、この少女の為だけの騎士だろう。

「・・・邪魔者は、消えますか・・・」

「んじゃ、2時間後に様子、見に来るわ」

紺堂は二人を残し、病室を後にした。

廊下に人氣が無いのは勿論、絶対安静の焔香のため。

やけに大きく響く足音を聞きながら、紺堂は自分の部屋に戻った。

安っぽい机に置かれた、いかにも上等な封筒を手に取る。

元々、遠回しの文章で何度も読み、内容はもう覚えている。

堅苦しいその文を集約すると『機関』への招待状。

> 凶犬く隊員の情報を流せ。という事らしい。

だが・・・

「残念だよなア、入隊時点で俺も騎士に含まれてるらしいから」

少しも残念そうでない口振りで、封筒にライターを近付けるとみる

みる縮み、跡形もなくゴミとなった。

「> 凶犬くは騎士^{ナイト}。どんな状況であれ、王^{キング}(隊長)を護れ」か・・・

・。確かに契約書にはあったが、そんな深い意味とはなア」

> 凶犬くのそんな空気が、きつと周囲から狂犬呼ばわりされる所以だろう。

「医者が騎士つてのも似合わねえと思うがな・・・」

悪魔に、やぶ医者。

どちらも騎士だなんて到底、有り得ない。

「まあ、それが>凶犬<か」

紺堂はニヒルな笑みを浮かべ、忌々しい手紙の燃えかすを窓の外へ投げ捨てた。

君が為の騎士【後日談】（後書き）

かなり間が空きました。

まあ、補足という形？になるかな、と思います。

次の話は、急展開？？にするつもり・・・です。

また、ねじれて違う結末に着地しないように頑張ります。ハイ！

拾ったのは、天使か鬼か

「ただいまー」

このひどい雨の中、外に出ていた焰香が戻って来た。

「雨が降りだした途端、仕事押し付けたあげく、黙ってどっか行って・・・」

すかさず始まった黒の小言を、焰香は上手くかわす。

「ごめんって。それより、黒？」

キラキラした笑顔を浮かべた、主人の無邪気な様子に、黒も警戒を怠らない。

「ーこういう時は絶対、何かある。」

「ナニ？」

「あーもう。ごめんね」

「ハイハイ、反省する気はないのね。・・・で、そのボロい箱は何？」

焰香が愉しそうに持つには何とも不釣り合いなソレ。

不可解そうに黒は、眉間にシワを寄せた。

「んーとね、怒らない？」

上目遣いをされても、その手には乗らない。

「モノによるね」

読んでいた報告書を置き、腕を組む。

まあ、どんなに威圧的な態度をとっても、この人には通用しないのだが。

黒は長く、息を吐いた。

「？でね・・・」

努めて可愛いらしく、首をかしげた焰香。

「いつも、気になってて。今日は雨降ってるから・・・濡れると可哀想だし」

「ーつまりは、箱の中身が心配で仕事を僕に押し付けた訳ですか。」

「んで、持って来ちゃった」

「・・・」

もう、ため息しか出ない。

「別に”箱”はいーんだよ。中身を聞いているの」

箱を開けるよう指示すると、嬉々として中身を取り出して見せた。

「見て、可愛いデシヨ？」

彼女が差し出したのは完全に、敵意剥き出しの三毛猫。

「・・・」

なんで、仔猫じゃないんだ！とか、それフツーに野良猫でしょ。とか突っ込み所が多すぎて、暫し黒は沈黙した。

「三毛猫でしかもオス。珍しーでしょ

?いつも、餌やってたの」

「・・・」

いつもって、いつだよ!?

黒はガクツと肩を落とし、低い声で

「・・・とにかく、どっか置いてきなさい」

ドアを指差した。

すかさず、抗議される。

「ええー。この雨の中、返して来いってゆーの?!」

「そうは言って、無いでしょう」

こうなると手を付けられないのは、分かっている。

「もう！今更、猫ちゃんの一匹や百匹変わらないってば」

「・・・いやいや、変わるから！

「あのねえー」

「何言ってるんですか」

いつの間にか隊長室に、入ってきていた杏子は呆れたような声を上げた。

「隊長、もう一つ言わなきゃいけない大切な事、あるでしょう」

杏子の意味深な発言に、黒は首をかしげた。

「何かやったの？」

黒の尖った声に、杏子がクスクスと笑う。

「いえいえ、大変な物を拾ったようで・・・」

「え、何それ」

聞いてない。と黒が焰香の方を見ると、気まずそうに瞳を伏せた後、ぼつぼつと語り始めた。

拾ったのは、天使か鬼か（後書き）

かなり間が空いたので、区切りの良い所で投稿しときます。

暫し、お待ち下さいませ。

拾ったのは、天使か鬼か【貳】

今日は朝からずっと雨が降っている。

「あの子、大丈夫かな」

いつも餌付けしている、ネコの事が気になった。

軍の敷地に住み着き、皆からエサを貰っているネコ。

気安く触れさせないくせに、エサのためだけに居座り続ける。まるで昔の黒のよう。

そう思えて、必要以上に構ってしまっている。

「ちよつと、お散歩行つてく」

「あ、ダメです！まだ本調子でない隊長の代理で、黒隊長は会議に出たんですから」

バレたら叱られます。とわたわたする隊員を余所に、お気に入りの傘を引つ張り出しコートを羽織る。

「バレる前に帰ってくれば、いーの」

「また、そんな事言つて。隊長！・・・もう」

そして、いつものようにネコに餌を与えて。

不意に、駆け寄ってきた少女に気付いた。

印象的な燃えるように、赤い髪。

その少女、年は10ぐらいだろうか。

軍の敷地に居るといふ事は、関係者???

なんて思っている

「あなた、ナニ？」

少女に不釣り合いな、硬い声で問われた。

まるで、不思議な生き物でも見るような目付き。

なぜ、そんな警戒されているのか、全く身に覚えが無い。

隣に立つ隊員に視線をあげると、やれやれ。といった風に首を振っている。

「別に、何もしてないもん！」

「分かんないでしょ、隊長なら」

「はあ？それ、どーゆ意味」

「いえいえ」

失礼な部下をキツと睨み、一旦ネコを預け、にこやかな笑顔で女の子と向き合った。

「ナニっていうのは、どーゆー意味かな??」

「……まあ、一目で混血って判るよね。だったら「アタシ、混血を見るの初めてだもん」

甲高い少女の声に心の声を遮られ、心底驚き目を見張った。

まさか……。

「アナタ、心が読めるの？」

焰香の一言に、注意散漫だった隊員はほとんど反射で構えをとる。ネコを抱えたままなので、少々可笑しいが。

それを目配せで制し、警戒している少女の方へ一歩、近づく焰香。試しに心をブロックしてみると、困ったように見上げてきた。

「……ふうん、面白いかもね。」

「言えない。……ねえ、あなたナニ？」

”何者”ではなく”何か？”なんて、久しぶりに訊かれたので、愉しくって仕方がない。

「私？そうねえ……」

何といえ、興味をそそるだろうか。小首をかしげ、思索すると「隊長、そろそろ」

隊員が時計を示しきて。

「うん。分かって……んん!？」

慌てて、二度見してしまった。

思っていたよりも時間が経っていて。

もう、とっくに会議が終わっている時間だ。

「あ。ヤバイ！えと・・・とにかく。おいで？」

「・・・それで？」

自分が退屈な会議に出ている間、この主人はそんな事をしていたのかと、思った以上に冷たい声が出た。

「え・・・とね」

気まずそうに、目線を落とした焰香。

一応、悪いとは思っているらしい。

「どうもその子、軍の監視下に置かれてるらしくってね。敷地内にでしか遊ばせてもらえないんだって。だから・・・」

困ったように焰香は、ドア近くに控えている隊員に視線を送る。

「この子、特殊能力の持ち主ですから、軍も監視が厳しく・・・」

隊長はそれを”>凶犬<が引き取るから”と解いた次第です」

隊員が簡潔な説明の後、ドアを開けるとそこに件の少女が立っていた。

美しい赤毛に花を挿し、ベージュに花柄のワンピースは明らかにあの人の趣味だ。

この国の統治者で、>凶犬<の直属の上司である焰香の叔母、詩織。暇さえあれば、焰香に自らデザインした服を着せ、喜んでいる。

「陛下にも、報告済みって訳ね」

除け者にされたようで、面白くない黒に焰香は微笑んだ。

「そ。で相談なんだけど・・・」

「はあ？なんでまた・・・」

「だって、心が読めるんでしょ？」

「いや、だからって。俺にはさっぱりですが」

焰香の提案に、黒と隊員は首をかしげた。

「快くOKしてくれたよ？」

なぜダメなのか、焰香は理解出来ないらしい。

「心が読めるのは、かなり不便でしょ、だからその力をコントロールする練習をすれば良いじゃん」

ナイスアイデア！と強く頷いている焰香を他所に、黒と隊員は秘密会議していた。

「どーします？隊長はその気ですが」

「そりゃ、隊長の意思だからねえ・・・」

「百鬼なまじりですよ、あの百鬼！」

隊員が興奮するのも、無理はない。

百鬼といえは古くから続く、武芸に秀でた一族。

軍や警察などに多くの門下生を持ち、その名を出すだけで、一目置かれるような凄い名門の道場も持つ。

そこで、少女の特別な力をコントロールするのに、武術で精神を鍛えようと焰香は言うのだ。

「まあ百鬼の名が出るのも、不思議じゃあないし」

「どうしてです??？」

一人、納得出来ない隊員は首を捻った。

「実は・・・焰香も門下生なんだよね、百鬼道場の」

「ええッ！」

心底驚いた様子の隊員を宥め、知らない？と首をかしげる。

「知りませんよ！」

「ウチの隊には多いんだよ。昔>凶犬<に百鬼一族の人が居たから、それで」

「それも知りませんよ・・・オレ」

がっくり頂垂れる隊員は、さておき。

「で、焰香？」

主人の方を見ると、少女と楽しそうにあやとりをしている。

「なに？」

「その子は、了承したの??」

すると少女がこちらを向き、小さく頷いた。

「じゃあ・・・ここにサインしてくれる？」

一枚の紙を差し出す。

それは、金文字で誓約についての重さが書かれた>凶犬<の入隊志願書。

「うん！」

それを、一読もせずに少女はサインした。

たった一文字、茜^{あかね}と。

少女にぴったりの色の名前。

「その名前、良いでしょ。私が考えたの」

こちらを見る焰香に誉めて、誉めたと振る尻尾が見える様だ。

「百鬼家に、養子と言うことで良いんだよね」

「うん、そお。だから、これからは百鬼 茜として>凶犬<の大事な一員だよ？」

柔らかく、微笑む焰香。

>凶犬<に入隊すれば焰香の牽制が効き、絶対の安全が保障される。

「百鬼の人達、女の子は皆”姫”って呼ぶような、優しい家柄だから安心だしね」

「うん！」

こうして>凶犬<にまた一人、新たな隊員が増えた。

百鬼^{なぎり} 茜^{あかね}。

赤毛に白い肌、>凶犬<では天使として可愛がられている。

生まれつき、人の心を読むことが出来る能力を持つが、百鬼の武術で精神、肉体的にも鍛えられた。

武術遣いで在りながら、生まれ持った力で敵を揺さぶる戦い方は、まさに鬼のようで。

> 凶犬くのかげがえの無い隊員となった。

拾ったのは、天使か鬼か【忒】（後書き）

あー、なんかグダグダしてませんか？
どうも忙しくって、文章が書けない。

そんな物を出すなって思いますが・・・。
まあ、季節物のハロウィンが書きたいので！

乞う、御期待！

・・・やっぱり、期待しないで。

暗黒街の住人

薄暗い路地。

湿った空気に混じって、生臭い血の匂いが漂う。

地面には、血で描かれた幾つもの文字と召喚円。

「ふーん。噂には聞くけど、まさかここまでとはね……」

そこは、悪魔信仰者による殺人現場。

現場確認をした焰香はすぐに凶犬メンバーを召集し、会議を開いた。

「今回の件ですが……警察との合同捜査となります」
司会を進めるのは、情報通の杏子。

「ほんつと、面倒！」

「焰香、静かに」

「はい」

黒に注意され、焰香は不貞腐れたようにソッポ向く。

会議の内容なんて既に頭の中。

要するに、つまらないのだ。

「で、概要ですが……ここ数カ月間、悪魔信仰が流行っているという噂が流れていました。」

まあ、都市伝説のようなモノで、清らかな乙女が供物らしい。とか夜歩きしてたら生き血を採られるなど、噂を挙げればキリがないです」

大きなスクリーンに、写真が次々と映されていく。

どれも子供には見せられないような内容で、事実まだ18に満たない隊員達は、傍の隊員から無理矢理に頭を下げられていた。

「被害数は16人とみられ、いずれも身元不明。発見が遅かった為野犬等に……。既に5件、似たような事件があり警察も手を焼い

ているようです。悪質化の恐れもあるので、行き過ぎた悪魔信者の始末。警察からは拘束と言われてますが、まあ無理はしなくて良いでしょう」

「だよなあ・・・」

「悪魔信仰は、結構根深いからな・・・ぜってえ単独犯じゃないだろ」

「16人っていう人数も異常ですし」

隊員達が意見交換に入り、緊張が高まる前にと、黒にそつと小声で話しかける焰香。

「ねえ。黒も信者とか、いなかったの？」

本人に聞いた事はないが、話の端々から黒がかなり高位の悪魔である事は、焰香も気付いていた。

「んー。どうだったかな？」

笑いながら、首をかしげる黒。

「あ、また誤魔化す」

不満そうに焰香が口を尖らせると、少し困ったように笑った。

「分からないんだよ・・・信仰ってのは、ただの一方通行なの」

「ふーん」

黒の説明は、他の隊員の耳にも入ったらしい。一気に質問が集中した。

「じゃあ、供物ってどういう??」

「信仰の意味は・・・」

「信仰されるのは、かなり上位の悪魔だけど基本、召喚されなきゃ何も出来ない。信者がいるなんて分からないし、ましてや供物用意しました。なーんて知るよしもないよ」

悪魔側の情報に、隊員達も納得したように頷いている。

「信仰の名の元に、殺人をしている。でも本人達は大真面目な訳ですか」

「――厄介だ。」

会議室に、重たい空気が漂った。

そんな空気を明るく焰香が払拭する。

「ま、やってる事はヒトゴロシだし、いつものようにサクッと片付けるよ！」

隊員達を鼓舞し、さっさと仕事分けをしていく。

「第一班は、信仰組織に潜入捜査よろしく 第二、三班は夜間の見回りや聞き込み、残りは私に付いてくる。以上、解散」

がやがやと隊員達が出ていき、残りは二人。

「当然、アタシは情報収集ですよね？」

会議中もパソコンの前から離れなかった羽野杏子。

「じゃあ俺はいつも通り、警察との間に入るわけですね・・・」

紫前類は先を思いやり、ぐったりとしている。

それを見て、焰香は満足そうに頷いた。

「うん！頑張つてね？」

——この二人は>凶犬くの中でも、お気に入りだから。

苦笑した黒が二人に視線を送ると、分かっていると小さく頷いた。

「潜入、聞き込みの方は任せて大丈夫だろうから。行こっか、黒？」

「ハイハイ、現場ね」

「・・・で、どういう事ですか？コレ」

焰香の口調が変わった時は、要注意。

>凶犬くの隊員なら誰もが実感している事だが、警察は勿論そんな事知らない。

捜査員の一人が面倒臭そうに、コチラへ目をやる。

「万が一にも悪魔が出るとマズイので、清めている所ですよ」

血塗られた路地は清められていた。

勿論、写真撮影や何やらした後だろうが、聖水まで撒くなど・・・。

「黒、大丈夫？」

周りに悟られぬよう、焰香は唇だけを動かす。

黒は顔色一つ変えなかったが、確実にその身を蝕まれている筈だ。

耐性はあるらしいが、無理はさせたくない。

警察の嫌がらせに奥歯を噛み締めた。

「>凶犬くが来る事を知っていれば、遠慮したんだがね・・・」
騒ぎを聞きつけ、がっしりした体格の男が近寄ってきた。

それを見て焰香は益々重たい空気を放つが、立ち振る舞いだけではまったく分らない。

「あら、これはこれは。廣瀬警部ひろせ、お元気そうですわね？お仕事にも熱心なご様子。悪魔避けの聖水なんて、わざわざご用意して下さって」

辛辣な言葉を吐きつつ、口元には笑みを忘れない。

「漆黒のお嬢さんも未だに、お美しいですな」

そう挨拶を返す廣瀬のいかつい顔にも、親好的な物など一つも無い。傍目から見ると背景に雷鳴が轟くようだ。

二人は、まさに犬猿の中。

「ほんつとあの集団って、能無しの猿山ね」

「名の通り、あの狂犬共が・・・」

と、影で言い合っている。

特に廣瀬の方は、焰香を隊長とは呼ばず”漆黒のお嬢さん”と言う始末。

出会ってから十数年、あまり年を重ねない焰香を揶揄するような言葉も、お構い無しに言う。

「あら、廣瀬警部こそ。少しがっしり（太り）しました？そのお年でも、体を（ムダに）鍛えてらっしゃるのかしら？」

まあ、売り言葉に買い言葉の焰香も、遠慮が無いが・・・。

そんなビリビリした空気の中、廣瀬と普通に話せる類が進んで前へ出た。

「すいませんが、こちらも調べたいので場所を開けて頂いて良いですか？」

「・・・ああ」

昔の部下に一瞬、廣瀬は毒気を抜かれたようだ。

「……隊長、これを狙ってたな。」

類はその要望に応えるよう深々と一礼し、隊長の傍らへ戻る。

廣瀬は少し目を細めたが、いつもの強気の顔に戻り、渋々といった様子で場所を開けた。

「ふん、警察の邪魔はするなよ」

「どうも警部。その日陰でお休み下さいな。バテますよ？」

しなを作り、にっこり微笑む焰香。

警官達はその笑顔に心奪われたようだったが

「こつちも暇じゃないんでね。見張りにお前は残れ。他は一旦、戻るぞ」

廣瀬は鼻を鳴らしただけで、足早に警官を伴って去っていった。

お前残れ。の一言で置いていかれた若い刑事は、有名な漆黒家のお嬢さんくを目の前にし、硬直している。

「つたく、喰えないヤツ」

廣瀬に悪態を吐く焰香に対し、ヒツと息を飲むものだから

「あ、君も喰えないねー。まずそ」

なんてからかわれている。

「隊長、おふざけも程々に」

「はいはい」

ため息混じりに類が間に入ると、あまりに呆気無く焰香は身を引いた。

そう言われるのを待っていたかのように。

その気遣うような視線の先には、さつきから壁に寄りかかり、全く動かない黒。

焰香は、それを悟られたくないのだ。

黒も腕を組み、威圧的な態度をとってはいるが、やはり体調が悪いらしい。

素早く、現場を確認するしかない。

「類、不審な物あった？」

「無いですね」

あらかた探したが、何も無い。

「あつたとしても警察が持つて行ってるでしょう」

もつともな、その言葉に焰香が頷いた時・・・

「焰香ッ！」

黒の鋭く発した声に、思わず身構える。

「上か・・・！！」

逆光だが、人影を一つ確認出来た。

迷路のような狭い路地だ。どこからでも移動手段はあるだろう。

若い刑事は、挟み撃ちをしようと思いで路地を抜けて行った。

「類！」「分かってます」

黒の声で、類の銃が火を吹く。

路地中に銃声が響き、確かに人影がよろめくのが見えた。

「当たった？」

「足を狙ったんですが、かすっただけです」

不規則な強風で弾道が僅かに逸れたらしい。

人影は、足を引きつりながらも姿を消した。

悔しそうに類が銃を下ろす。

ここは壁しかなく、上には登れない。

「すいません、逃がしました」

「類のせいじゃない」

焰香は一つ息を吐くと、黒の方を振り向く。

「もう・・・良いよ、黒」

その声で黒は、糸が切れたように崩れ落ちた。

「副隊長！？」

「黒、大丈夫？」

黒はひどく苦しそうに、息を吐き

「平気だよ」

ゆっくりと起き上がり壁に手をつく。が、どこか痛そうで動きもぎこちない。

「ね、お願いだから・・・」

焰香はそんな黒の傍らに膝をつき、泣きそつな声で乞う。
それでも、黒は首を振った。

「ダメだって・・・」

蚊帳の外に置かれた類は、ただ混乱するばかり。

「もう、いい!!」

焰香はナイフを取り出し、黒が止めようとするより早く、手の甲へ一閃。

赤い筋が走った。

「ッ、馬鹿!」

サツと顔を背ける黒に、焰香はその滴る赤を近付ける。

「血が、欲しいんでしょ?」「・・・」

黒の顔が鬩り、やっと類も理解した。

使い魔は主人から血を与えられ、力をつける。

黒は混血の焰香に仕えている分、幾らでも貰えるのだが、血を口にする事自体、好まなかった。

どれだけ焰香が頼んでも。

今も黒は、焰香の方をまるで見ようとしない。

「類、早く止血して」

辛そつに身を振り、呻く黒。

その間にも、貴重な血が焰香の手から伝い落ちていく。

「ねえ、黒。お願いだから」

首を振る黒に、焰香は手を近付けた。

真っ赤な血が黒の頬に滴り、一筋の跡をつける。

それで観念し、黒は動くのをやめた。

薄く開いた口に血が流れていく。

一回、喉を鳴らすと黒は直ぐに焰香の手を取った。

傷口を舐め、止血を施す。

「・・・どれくらい我慢してたの?」

黒は口の端を拭い、質問を避けた。

「焰香の血は中毒性が高いの、癖になったら困るでしょ」

「だから一生、養ってあげるって！」

その時・・・

「漆黒家の者ですね」

路地にパツと現れた、見覚えある制服。

凶犬と対になる、> 獵犬< 部隊。

まず、出会って嬉しい相手では無い。

焰香は背筋をピンと伸ばし、軽く会釈した。

「その通りですが、何か？」

「貴女の使い魔が一般人を襲ったとの報告が上がっている。すぐにも事情を訊きたい」

淡々としたその口調に、類は血が沸騰するかと思った。

「そんな、あり得ない!!!」

「――心当たりといえば、焰香を“研究機関”から奪還した事だろうが・・・何故、このタイミングなのか。」

大声で威嚇し相手を非難したが、焰香に片手で制された。

「類、静かに」

黒に至っては身動きすらしない。

まるで、焰香の許可がなければ動かないといった風。

「承知しました・・・黒」

「はい」

二人は一瞬、お互いの視線を絡ませたが、直ぐに黒が目線を下げた。そのまま、> 獵犬< の方へ迷いなく進んでしまう。

「では、この悪魔の身柄は> 獵犬< の預かりとする。貴女にも後日お話を訊きに参るその旨、お忘れなきよう」

黒の手足に銀の枷がはめられた時、焰香が小さく体を震わせた。

大丈夫といった風に微笑む黒。

類には動くな。と鋭い視線を寄越したが・・・。

「では、我々はこれで」

現れた時と同じように気配を絶ち、> 獵犬< は姿を消した。

「あーもう!!」

ダンツと激しく、焰香は壁を蹴りつけた。

そして、そのまま座り込んでしまう。

「・・・仕方無かったの」

焰香の泣きそうな、か細い声に興奮していた頭が徐々に醒めていく。

「どういう事です?」

「あの時、少しでも黒が動けばアイツら、銀の弾丸を撃つ気だった」

「黒隊長なら、避けれるでしょう!」

「・・・怪しい動きをした黒を狙ったものの、側にいた隊員に当た

っちゃいました。なんて事が通るんだよ」

隊員に甘い焰香の心理を利用した、巧妙な作戦。

類は拳をきつく、握りしめた。

「どうなるんです?」

「これをキツカケに、私を引っ張り出す気だろーね」

「そんな!」

「・・・類、ちょっと頼まれてくれる?」

立ち上がった焰香は、いつもと全く変わらない表情を貼り付けていた。

「・・・なんなりと」

「隊員達にくれぐれも秘密で。杏子と一緒に・・・よろしくね」

笑顔で告げられた命令は、酷く単純で一番難しい物だが、類は頷くしか無かった。

『隊員との接触禁止』

ただそれだけ。

しかし、この悪魔信仰の事件は・・・どうするんだ?

怪訝そうな類に、焰香は微笑む。

「よろしくね 類」

「ーっやっぱり、僕ですか。」

「了解」

暗黒街の住人（後書き）

あーやっと、布石を消化した

満足、満足・・・って、アレ??

なんか複雑になってる気が。

どーしよう、ハロウィンまでに終わるかしら??

嗚呼、なんて事してくれたんだ、自分！

嘘つきは、誰か??

「類、杏子・・・例の件は、進んでる??」

ぐったりとした焰香は、机にうつ伏せたまま顔を上げない。

「はい、裏付けもほぼ済んでいます。隊長こそ平気ですか?この作戦、どう考えても・・・キツイですよ」

杏子の声に少し顔を上げ、すぐに視線を落とす焰香。

「・・・だよ」

最初っから分かっていた。現場を見た時から、すべて。

ただ、黒を取られるのは計算外だっただけだ。

「でも・・・仕事だもん」

紅茶に手を伸ばすが、すっかり冷めてしまっている。

それだけ長い時間、話し込んでいたらしい。

「準備もあるし・・・そろそろ時間だね」

焰香の言葉で、ハツとした様子の杏子と類。

それまで口を挟まなかった類が、声を荒げた。それも怒っている所為か、少し掠れている。

「隊長、本気ですか!」

「大丈夫だよ・・・」

「そんなこと言っても・・・」

この後、類はなんて言っただけ??

つい先程の会話なのに、もうぼやけてきた。

最後に、まだ何か言いたそうな類を杏子が一礼して出て行ったのは、覚えていっているのに。

体が、頭が・・・重い。

まるで失恋して泣き腫らした時みたい。

そう思える程、ひどい虚無感だった。

・・・まあ、失恋なんてした事ないケド。

自分という物がどんどん崩れていくのを、直に感じる。

あと、数時間か。

いつものように隊長室で、書類に目を通すが次々と隊員達が持つてくる。

いつもと違い、どんどん溜まって山積みになるのは・・・黒という右腕が居ないから。

改めて”足りない”事を実感させられて、ゴチンと机に頭をぶつけた。

痛かったけど、それと涙が出たのは違う気がする。

そのまま、感情の起伏に耐えていると

「たいちよー、食べ過ぎですか？」

新たに書類の山を積み上げに来た隊員に気遣われ、ようやく顔をあげる。

「・・・ん、そうそう。応接室にあったマカロン、もう無いよ?？」

「隊長！またですか・・・。黒隊長に怒られますよ」

「あははは。そうかもネ」

ふと気を抜いた時に、名前がサラリと出てきて。胸が痛む。

それだけ黒に、自分が依存しているのだ。

「黒にはナイシヨなの」

何も知らない隊員達に笑顔で接しつつ、黒の名に動揺した心は奥底に隠した。

隊員達につくウソは、いつだって痛い。

類と杏子には”特殊任務”を任せだし、あの二人なら平気だろう。

問題は・・・他の隊員達か。

焰香は隊長室で一人、考えを巡らす。

『どうすれば被害が最小限で済むのか』

これは分かりきった事だ。他に打つ手は無い。

でも・・・。

躊躇する思考を無理矢理振り切り、淡々とした指示メールを送る。

これで少なくとも、隊員達は安全だ。

「頼りにしてるから・・・」

焰香はじつと頭を垂れ、大事な者達のために祈った。

「はい、皆に報告がありまーす」

隊長室から出てきた焰香は、>凶犬<隊員を呼び集めた。続々と隊員達が並ぶ。

「なんですか？」

「ボーナス、とか」

そのはしゃいだ声音に、焰香はニッコリ微笑んだ。

「そう。全員・・・」

「やつぱ、ボーナス!？」

「謹慎!?!」

「・・・は?」

啞然とする隊員達に、焰香はもう一度告げる。

「だから、き・ん・し・ん!本日付けで一週間程度。ここへは出入り禁止、当然>凶犬<で集まる事も。これは隊長命令、なんか文句あるの?」

「ええ　!?!」

>凶犬<メンバーが大きく揺らぐ、爆弾並みの発言を残した焰香。くるつと銀髪を揺らし、重厚なドアへ迷いなく歩む。

「隊長・・・まさか捜査で、俺ら地雷踏みましたか?」

隊員の不安そうな声にも振り向かない。

「　解散」

絶句する隊員達に返答させせず、焰香は扉の向こうへ姿を消した。

「どっついう事なんだ?」

「黒隊長に聞こう!」

「いや、副隊長は最近見てない」

「どーすんの?」

「・・・命令だろ」

混乱していた隊員たちも、その一言で意見がまとまった。

「だよなあ・・・」

「まあ、休暇みたいなもんだろ」

『イヤ違うから!!』

その言葉には皆、突っ込みを入れたが・・・隊長の傍若無人振りは今更の事で。

もう諦めるしか無い。

「鍛練怠るなよ」

「そりやお前だ・・・じゃあな」

「おう」

「皆様、お体にお気をつけ下さいませ」

「んじゃ、またねー」

「ではでは。一週間後に」

それぞれ名残惜しそうに、部屋を後にした。

十数分後、ガチャ。とドアノブが音をたてた。

誰も居なくなつた待機室に、戻つて来た焰香。

「ごめんね」

隊員達の怪訝そうな顔を思いだし、それぞれの机を見やる。

急いで片付けたのだらう。ぐちゃぐちゃだ。

今、担当している事件だけで膨大な資料になるのだから、それも当然。

しかし、1週間もあの人達が大人しく出来るかな？

焰香は、一人柔らかに微笑んだ。

『ウソは誰でもつくし、綺麗な嘘は嫌いじゃない』

自分がかつて言った言葉。

この状況では・・・とても重く感じ、そして息苦しかった。

ゆったり壁にもたれていると扉が激しく開いた。

一瞬、誰か戻って来たか？と身構えたが、その乱暴な足音に安堵する。

こんな足音の持ち主など、うちの隊にはゼツタイ居ない。

「やっと、おでましか・・・」

現れたのは、十数人の軍人達。

軍部の中でも>凶犬<と同じく怖れられる規則違反を取り締まる部隊、通称>獵犬<。

「狂犬共はどこだ？」

「連れてこい！」

威圧するような態度は、流石と言つべきか。

狂犬つて露骨な表現・・・。

隊員達をそう呼ばれ腹を立てつつ、焰香はやつと来た待ち人の前へ、自ら進み出た。

優雅に一礼してみせる。

「ああ！隊員達なら謹慎させてるトコですよ？諸事情によってサツと、警戒態勢をとる>獵犬<が可笑しくてしょうがない。

「私一人に随分、賑やかですこと」

「おい貴様。何をやったかわかっているのか！？」

そりゃ怒るよね・・・怒らせるためにやってるんだから。

怒りで赤ら顔の軍人達に、ニコつと微笑みを向ける。

「さあ？何を仰ってるのか。謹慎命令を出しただけでしょう？」

焰香は、他人事のように自分に歩み寄る軍人を見ていた。

「>凶犬<隊長、もしくは銀猫。漆黒家の当主で間違い無いな」
荒々しく腕を掴まれ、無理矢理に顔を上げさせられる。

本当なら「触るな、駄犬が！」ぐらい言わなきゃいけないのだろうが。

抵抗すら面倒な状況なので、クスクス笑って見せた。

「こんな美人の顔も覚えられないの？」

まさに人を惑わす、悪魔のごとく妖艶に。

その場に漂う嫌悪と恐怖の空気も馴れた物だ。

「捜査妨害だ。これより48時間、我々>猟犬<が身柄を拘束する」
感情すら感じられない言葉と共に、冷たい重量がガチャリ。と手首にかかった。

手錠かけられるのも、なんか馴れてきたんだけど。

焰香は、そんな自分がなんだか可哀想で思わずガツクリと頂垂れた。

ガッツ・・・。

音をたててドアが閉まり、静寂が辺りを包む。

それを合図に黒は、鋭く息を吐きだした。

「・・・っ」

その途端、体中が痛みだす。

息をするだけでも苦しいという事は・・・

肋骨、何本かは折れてるな。

思わず顔をしかめる程の痛みに、脂汗がこめかみを伝い落ちた。

礫にされ、数日は経っただろうか？

私刑は相手が交替する事で長引き、やっと与えられた僅かな休息。

この間に、出来る事といえば・・・。

焰香の耳には入れたくないのだが、拷問を受けた場合には内容を
”必ず”報告する事が>凶犬<隊員には義務付けられている。(後
で焰香が10倍返しをするためだが)

そのため、今までの拷問一つ一つ丁寧に記憶をなぞっていく。

聖水バケツ2杯。切り傷15、6箇所。殴打・・・複数回(もう
面倒臭いので数えるのを止めた)。

相手は顔を隠していたが大方こんな事をするのは、皇族の連中が飼
っている奴ら。

軍人の可能性もあるが焰香にバレたら後が怖いから、こんな拷問はしないだろう。

何が、漆黒家に媚び売る悪魔だ。
黒はやれやれと首を振った。

混血種族の中でも特に、貴重な悪魔・・・皇族の血を誰よりも濃く引く焰香。

ほぼ純血の焰香を、良く思わない連中は皇族の血縁者だけでも数えれば限が無い。

「まあ、計算外は・・・」

背中の火傷は、マズイよなあ。

^{ほのか}主人の近くに居ないと使い魔は、免疫力が落ちる。

元々、警察の撒いた聖水のダメージがあったため、聖水が意外に効いた。

爛れた肌が引き攣って痛い・・・が、
治りかけた傷をもう一度決るのは、拷問では常套句。

既に何度か気絶寸前までやられて、もういつそ塞がるな、とまで思ったが体力も限界に近いのだ。

治癒力だつて落ちていて、未だに傷が疼く。

勝手に逃げるわけにも、いかないし。

使い魔の自分が動けば、焰香の方に飛び火するのが目に見えている。そうなれば、向こうの思う壺だ。

しかし、本気を出せば直ぐにも出られるような甘い監視体制で、拘束されてる自分が惨めに思えてならない。

僕、マズじゃないんだけど。

思わず不満を鎖にぶつけたが良いタイミングでドアが開き、黒は深くため息を吐いた。

休憩は終りらしい。

「おい、良い知らせだ」

こういう愉しげな声音の場合、どう考えたって自分には悪い知らせ

だろう。

いい加減、この悪趣味にも付き合いきれないが、せめて感情を表情に出さないようにする。

「お前が口を割らないんで>凶犬<の連中に事情を聞くはずだったが、あの”銀猫”が捜査妨害をして連行されたらしい。お前と同じく尋問にかけられる・・・驚くと思ったんだがな」

笑みを引つ込めた男に、冷たい視線をくれてやる。

「主人の言動にいちいち、驚く様では勤まりませんから」
内心やっぱり、としか思わなかった。

元々、漆黒家の使い魔は危険だとか何とか言っつて、焰香を査問会にかけるのが目的だろうに。

そして、事実何かやりかねない焰香が大人しくしてる訳がない。

まったくあの人は。無茶苦茶だ。

痛む体を一旦忘れ、頭をフル回転させる。

あの焰香がわざわざ”駄犬共”に膝を着くわけがない。

つまりは、主人の危機ほのかを感じて、自分が脱走したとしても問題無い筋書きで準備万端という事か。

「教えてくれてどーも」

さて、この傷のお礼をしないとね。

黒は無理矢理、鎖を引き千切った。まるで、バターを切るより容易く。

今まで安全だった男の立場は、最早棺に片足を突っ込んだ状態だが、理解出来ていないのだろう。

「脱獄すれば、主人の立場が危うくなるぞ！」

「でしょうねえ。でも、その前に・・・告げ口する人間がいなければ、分からないでしょう？」

一気に間合いを詰め、黒は悠然と微笑んだ。

乾いた唇をチロリと舐める。

傷が深いと血が欲しくなるんだよね、本当は。

焰香には・・・秘密。

というより何が何でも、知られてはなら無い”本性”。
例えウソを吐いてでも、隠し通す。

口の端から覗く、鋭い犬歯は飾りじゃない。

焰香に仕える以前、悪魔達も口にする事を恐れたこの名も、伊達じやない。

「ニンゲンは久方振りかな」

その味は喉を潤し、その断末魔は美しい旋律。

主人には教えられないのは、自分の醜いその姿。

そして・・・

『ウソは誰でもつくし、綺麗な嘘は嫌いじゃない』

かつてあなたが言ったその言葉で、僕は救済される。

そんな僕は、やはり”ウソ吐き”らしい。

「さて、やっと仕事が出る」

口許の赤を拭って、黒は満足そうに微笑んだ。

「監守って、何人いたかな？」

嘘つきは、誰か?? (後書き)

はい、終わりませんでした・・・。

ハロウィンも書いてあるけど、コレを上げてしまわないと。
やってしまったな、自分という気分です。

受験まで、あと2週間・・・現実逃避中です。

狂犬と獵犬

> 獵犬<達は、焰香の尋問で行き詰まっていた。
どう探しても、> 凶犬<の隊員の所在以下、その他の情報が一切無いのだ。

書類などに隊員の名前は在るものの、戸籍上は存在しない者達。それだけでも厄介だが、本当に恐ろしいのは・・・その隊長だ。この状況で、相変わらず無邪気に笑っている。

「不思議な方が面白いでしょ？」

まるで怯えるという事を知らず、拘束衣を着せられても興味津々といった様子。

なまじ、貴族だけに拷問する事さえ出来ない。

それをまた、心から残念そうに

「えー、シヨック！> 獵犬<の拷問って、結構有名なのにー。あ、言っとくけど、黒もいくら拷問されても口、割らないよ？」

愉快そうに微笑む焰香に、気押されないよう男も無理に笑顔を作る。

「ああ。悪魔の方が・・・あの監獄で手酷く、扱われてるらしいがな」

その一言で紅の瞳が一瞬、鋭さを増したが直ぐに取り繕われた。

「だってアタシの使い魔だもん」

「あの使い魔にして、この主人在り。だな・・・。そろそろ交替の時間だか、アイツはまだか？」

男は苦々しく吐き捨て、この異空間からさっさと逃げ出す事を決めた。が、

「もうちょっと、お話ししましょうよ」

焰香は、にこにここと微笑む。

そのまま目を逸らせずにいると、良いタイミングでドアが開かれた。「失礼します！」

「おう、どした？」

そつと耳打ちされた言葉に驚愕し、小首をかしげている焔香から見えないよう言葉を交わす。

「本当か、それは」

「はい。どうしますか？」

どうするかと言われても・・・

「とりあえず、ここの監視強化が先決だ。行け」

指示を出し、もう一度怪物と向き合う。

よほど、顔色が悪かったらしく

「どーかしました？」

と尋問するはずが、コツチが訊かれる始末。急いで表情を取り繕う。

「お前の、使い魔が逃走したそうだ。それに数人、看守が行方不明らしい。お陰様でアンタの拘束時間が増えたよ」

口元はニヒルに歪めたものの、最悪の事態だ。

怪物につき従う使い魔も今は首輪付きだが、元は化け物。

”あの”監獄からそんな悪魔が逃走など、表に出せばパニックが起きるほど、あり得ない。

否、あつて良いハズが無い。

「・・・黒が」

悲しげに寄せられた眉に、やっとコイツを揺さぶれるか？と期待した男だったが、次の一言に絶句した。

「あーあ、私が先に抜け出すつもりだったのに」

不満気に唇を突きだし、その紅の双眸をドアへ向けた。

居るんでしょ？

ガチャン。と音がして「まさか」と思いつつ、ゆるくり振り返る。

「お迎えに」

静かに一礼する“ソレ”は、ドアの一步外にピタリと立っていた。

「1命令は？」

布擦れの音などまったくさせない、幻影の様なその姿に思わずゾッとす。

「ん、そうねえ……。特殊任務の方はどうなってるの？」

スツと目を細める黒に、にっこり笑いかける焰香。不気味な空気だ。
「呼びましょう」

軽く一礼をして姿を消そうとする悪魔を、逃がす訳がない。

「待て！お前は、捕縛命令が出ている。それ以上、動くな」

悪魔の背に銃を向ければ、冷たい瞳をチラリと寄越した。

「……。それは、誰の命令です？」

「なに？」

「いーえ、何も。では……。後ほど」

「うん。よろしくね」

笑顔で見送る主人を置いて、悪魔は姿を消した。

「おい、どういいうつもりだ！」

掴み懸かりそうな勢いの男に焰香は、凶悪な笑みを浮かべる。

「そうそう。まだ、聞いてなかったけど有名な>猟犬<の拷問って、死人を出すらしいじゃない？」

「な……。そんな事あるわけ無いだろ！」

「でもねえー。その証拠を掴んだ途端、悪魔信仰の事件の調査依頼？まあ、私達を釣るエサとしては、上出来だったけど……」

「何が言いたい！」

「ねえ……。行き過ぎた拷問で出た死体、どうやって処理してるの？？」

その一言で、部屋の温度が一気に下がった気がした。

「隊員の情報全てを凍結。また、待機室には立ち入り禁止。って隊長、メール寄越したけど……。大丈夫かしら？」

特殊任務として、類と共に「悪魔信仰事件」を捜査する杏子は、パソコンにずっと向かっていた。

「黒隊長が連行された時は、かなり無理してたから……。少し壊

れてもおかしくないと思う」

類は神妙な面持ちでコーヒを口にした。

「そーよねえ。でもあの人達は元々、壊れてるよーなもんだし……
つて、見つけた」

キーボードの上、軽やかに踊る指先。

「あつた、あつたわよ。前言撤回！ やっぱ隊長、凄いわ……」
ハイテンションの杏子に付いていけない類は、首を捻るばかり。

「なんだよ、いきなり」

「ほら、コレよ！ 隊長の読み通りね」

杏子が指差すのは、何かの一覧表。

この状況で流石の類も気付いた。

「おい、これって……！」

「> 猟犬<の隊員名簿よ　ウチと違って、向こうは正規の軍人。
勿論、名簿も隠蔽されてたけど。なにしろ、この私だし？」

得意気に、澄まして答える杏子を片手で制す。

「あー、自画自賛は後……で？」

「これで事件解決よ」

「……は？」

呆気にとられている類に、杏子はため息を吐いた。

「コレ、猟犬の名簿ね。それでこっちが悪魔宗教の信者の一覧でし
よ」

画面に二つの書類が並べられる。

「比べるとほら、> 猟犬<の四割は信者なの」

「多過ぎだろ、いくらなんでも……で？ それがどう関係あるん
だ??？」

「だから、類はダメだって言われんのよ」

呆れたように、杏子が肩をすくめた。

「あのねえー、悪魔宗教なんてそんな簡単に入れると思う？ コーゆ
のは、紹介されて入るもんなのよ。例えば」

「政治家」

「そうそう、分かってるじゃない。何もかも規格外の私達だって、女王陛下のバックで成り立っているよーなもんだし。でなきゃ……ねえ?」

その恐いぐらい的を得た言葉は、この仕事をする上で充分理解していた。

「政治家と罰する側の>猟犬<の癒着か」

「これは、バレちゃまずいでしょうね。政治家と宗教も繋がりが深いみたいだし」

「そーだねえ。>猟犬<はウチ並みに権力を持つてるから、内側から腐らせて手の内に納めようって魂胆かもね」

聞き慣れた声が、すぐ横から聞こえた。

「黒隊長!?!」

いきなり姿を現した黒に、飛び上がる二人。

「えっと……脱獄、ですよね???」

「まあ、ね」

のんびりとソファーにもたれる黒。

普段より動きが鈍いのは、やはり……。

「監獄で、何かされたんですね」

杏子の指摘に黒は何も答えなかった。

しかし、どうも機嫌が悪いようで。

いつも焰香と騒いでいる人物と同一とは、とても思えない。

「じゃ、その資料で>猟犬<の所へ殴り込みに行こうか」

につこりと笑う黒に、バレないよう囁きあう。

「あんな、爽やかな笑顔で……」

「やっぱ”ちよっと”どころじゃないな、壊れ方が」

「はいはい、聞こえてるよー。いいから隊員達を召集、30分後に作戦開始だからね」

小さく息を飲み、二人は何度も頷いた。

「アナタ方の後ろ盾は、誰？」

ニコツと笑みを向けられても、どう反応しろというのだ。

「お前、なんだ・・・」

「もちろん、>凶犬<隊長です。猟犬の肅正をしに参りました」

そうだ。コレは、怪物という事を失念していた。

これほど簡単に、人間に拘束されるようなモノじゃない。

何か・・・目的でもなければ。

思わず椅子から腰を浮かすと、背後のドアが開いた。

新鮮な空気がサアと流れ込む。

「失礼します。遅くなりました」

やっと、交替の時間かと振り向けば、真っ黒な制服が立ち並んでいた。

思い思いに制服を着こなし、統一感がまるで無い隊員達。

唯一の共通点は、ケルベロスの紋。

「隊長、ご指示を」

”衣服の乱れは心の乱れ”という言葉に反し、まるで洗練された動き。

>凶犬<が地獄の番犬と呼ばれるだけはある。

「ウチの隊の肅正？・・・ふざけるな」

「いえいえ、大真面目です」

焰香はおどけたように、首を振った。

「>猟犬<における行き過ぎた尋問等は、以前から問題になっていました。牽制がひどくて。どこから崩していくか、かなり作戦を練ったんですよ？」

だから、わざわざこんな茶番に付き合ったのだ。

会議も警察と額を付き合わせる事が多く、どれだけストレスだったか。

「お陰で、宗教団体を解体。政治家はこれからほとんど釣りあげいく予定です。」>猟犬<も縮小されていく事でしょう」

「はっ、アンタ達ほんと化け物だな」

男の嘲笑に、焰香はニツコリと微笑んで

「化け物だろうと悪魔、怪物なんどでも。それが>凶犬<ですから
キツパリと言いつつ放った。

そして、その隊長は静かに笑う。

「私達は、正義の味方にはなり得ない。狂犬も扱いようによっては、
切り札になるでしょう。飼い主を咬まない限り・・・ね。>猟犬<
はそこを間違えたのだと、思いますよ」

「・・・かもしれない」

男は軽く顎を引いた。

「なんでも政治と宗教が絡むと、ややこしくなる」

「全くです。・・・では、これより>猟犬<の権限、及び隊員の身
柄は>凶犬<の預かりとなります」

テキパキと隊員に指示が出され、完全に猟犬と狂犬の立場が逆転し
てしまった。

男はその様子をただ、静かに見つめる。

胸中に渦巻くのは、上層部達への不満だ。

・・・手を出せば、>凶犬<に咬まれる事など分かっていただろう
に。

その後>猟犬<は、その在り方を問題視され、事実上の解
体。

しばらく、その話題で軍部内は賑わい、>凶犬<の手柄で万事解決
となった

が、しかし事件がそれで終わり、とは限らなかった。

「隊長、ご説明願いますでしょうか?!」

ずいっと焰香の方へ身を乗り出す隊員達。

皆、目が据わっている。

「落ち着いてよ」「ムリです！」

「何故、あんな嘘を吐いたんですか」

隊員達の剣幕に、とうとう来たか。と焰香は苦笑いをした。

「ウソ、ね・・・でも、そーするしかなかったんだもん」

いや。本当は・・・心配をかけたく無くって、どうしても言えなかった。

焰香は本心が透けないよう、視線を下げた。

「それでも！俺らはイヤなんですッ」

「せめてもう少し、ご自分を大事にして下さいよ」

「周りが、どれだけ心配するか」

う・・・。

隊員達にそう言われ、言葉に詰まる。

黒の方に助けを求めようとしたが、コワイ雰囲気。

「ねえ黒？」「ナニ」

返答も素早く、尖っている気がする。

「あのさ・・・怒ってる？」「いーえ。全然」

うわ、やっぱり怒ってる。

隊員達に視線を戻すと、はあーと深い溜め息を吐かれました。

「隊長、しっかり反省して下さいね」

「え・・・」

ぞろぞろと隊員達が部屋を出て行き、残るのは重たい空気。

「焰香。なんで皆が怒ってるか、分かる？」

腕を組み、壁にもたれた黒は姿勢を崩さない。

あの監獄の拷問を受け、立っているのさえキツイだろうに。

また、無理をさせてしまった。

「ゴメン・・・痛かった？」

「答えになってないよ」

呆れたように、黒が天を仰ぐ。

「僕の事は気にしなくて良いから、まず隊員達に謝っておいで。かなり心配してた」

ドアを指差すのは、今すぐ行くように。との事らしい。

チラリと表情を伺うと、いつもと変わらない優しい笑顔をくれた。

「一晩眠れば、すぐに治るよ」

それでも、暫く痕が残るだろう。

やっぱり黒は私を甘やかし過ぎる。

焰香が出て行った後、黒はすぐさまソファへ倒れ込んだ。

よほど体力の消耗が激しかったのか、眠気が波のように押し寄せ、朦朧としてくる意識。

それに流されながら、ふと思った。

しかし・・・また、あの監獄に戻る日が来ようとは。

そのまま自嘲気味に微笑んで、黒は重い目蓋を閉じた。

狂犬と獵犬（後書き）

いや、まさかこんなに間が空くとは。

申し訳ありません！

進路も決まっつて、肩の荷が降りましたので、これから頑張っつて執筆したいと思ひます、ハイ。

よろしければ批評、感想などお待ちしてます。

キツイ言葉でもOK、（・・・だと思っつ）

案外、メンタルは強いハズ。

サンタさん退治

「なあ、今年どうする?」

「どうするって、ああ」

「・・・クリスマス。」

「そうだった、今年も来るのだ。」

「あの、悪夢の一日が。」

「隊長、いい加減このジंकウスって無くなりませんか?」

「隊員達はうんざりした様子で切り出した。」

「何のこと?」

「対してもう、憔悴しきった隊員達には目もくれず、焰香は次々と書類に判を押ししていく。」

「ポンポンと、いとも簡単に。」

「内容ぐらい確認して欲しいものだが、」

「書類偽装なんて、君たちははしないうって信じてるから」

「なんて、キラッキラした笑顔で流されてしまった。」

「そんな重い言葉で、書類の正確さを求められても・・・。」

「困り果てる隊員達。」

「そうして焰香は、手元も見ずにコチラの様子を窺ってくる。」

「ですからウチの隊のクリスマス事情の事ですよ」

「んー。何かあったけ?」

「とぼけた風の焰香に、ガツクリ肩を落とす隊員達。」

「毎年、毎年なんでクリスマス休暇が無いんですか・・・過労死します。不幸過ぎデス」

「ウチの隊が優秀だから。忙しいよねー」

「じゃ何故、サンタの格好が義務なんです!?!」

「何故って、そりゃ叔母様の趣味」

「ですよー」

そう、軍の中でも特殊なこの隊 凶犬。

軍も警察も色んな意味で・・・警戒するような異形の集団だが、少なくとも表では、女王の護衛が仕事となる。

つまり、この国の女王陛下直轄の部隊だ。

しかしそのボスも、かなり変わっていて。

とにかく、服が好きなのだ。

いや、服とは正しくなかった。

要するに、コスプレだ。

この間のハロウィンだって・・・。

「ねえ、この格好、絶対おかしいですよね!？」

「えー。似合ってるじゃない」

焰香の格好は、真っ黒なミニのドレス。

ヒールの高いブーツに、三角の尖り尻尾に大きなツノ、パタパタと動く羽。

そう、悪魔の仮装だった。

「誰がどう見ても、皮肉です!」

「可愛いのに・・・」

堅苦しい軍のパーティーの中、かなり浮いていた。

もう、あの人の趣味は諦めているが、その所為でまた他の部隊との溝が広がったような気がする。

「仕方ないでしょ、どうしても今回のパーティーの警護にって言っ
んだもん。外交問題にも関わるから、軍人は一切禁止の筈なのに・・・」

隊員達に責められた所為で、焰香が拗ねた。

判子を押ししていた書類の山を、バサツと派手に崩し、机に足を上げる。

「こんなヒールの高い靴で、走れるワケ無いじゃん」

ズイッと眼前に突き出された脚の先には、高そうな皮のブーツ。

「た、確かに。それはそれで大変そうですが……」

もっと気になるのは、その格好です。

陛下、なんでこの人にこんな格好を!!

イヤ。似合ってるけど、似合ってるけども。

机に脚を載せるのは、ミニ丈のサンタ服でやるもんじゃ無いだろう。

しかも、ありきたりな真っ赤なサンタ服ではなくて……真っ黒なサンタ。

そのポンチョ、絶対毛皮ですよね??

もう、色々言いたい事がありすぎて、黙ってしまった隊員達に焰香は首を傾げた。

「どうかした??」

艶やかな銀髪、深紅の双眸が真っ黒な服によく映える。

あーもう。何も言うまい。

でも、せめて……

「隊長、机に足乗せたら、駄目デス」

「ええー」

焰香は不満そうに唇を尖らせた。

隊員達は隊員達で、その服でその格好だと、あの人の雷が確実に落ちる。

と、内心ヒヤヒヤだ。

「でも、隊長……」

「なに??」

「ほーのーかぁ?訊きたいのは、コッチだよ」

ビクッ!と面白いほど、焰香の肩が跳ねた。

素早く両足を地に着けたが、もう遅い。

「行儀が悪いから止めなさいって、あれほど言うのに!そんなんだから 凶犬 の隊長は。って言われるんですよ」

「ふーん、誰が言ってるの?誰が」

「開き直らない！」

この隊で、唯一焰香に対抗できる人物、副隊長の黒。

公私に渡って焰香の世話をする彼は、正真正銘の悪魔。

焰香と主従関係ではあるが、契約はとっくの昔に解消されていて、今は家族と言った方が近い。

そもそも>凶犬<は異形の退治を引き受ける部隊で。

当然、隊員達も普通ではない。

ましてや、混血の焰香に周囲の風当たりは酷いものだ。

しかしそれでも、同じように特殊な事情の隊員達を集め、家族のように大事にする焰香は、皆から慕われる>凶犬<隊長だ。

「ほら、早く支度して」

「はいはい」

「返事は一回！」

「はい」

こうして>凶犬<の、クリスマス・イブの長い仕事が始まった。

国賓を招く為に造られた迎賓館は、少し前に停電があつた時にセキユリテイが故障したため、現在は使えない。

その代わりに会場として選ばれたのは、有名なホテル。

それを丸ごと借りきった。

税金の無駄遣いと思うが、このホテル自体が国の所有物のため、あまり出費せずに済んだらしい。

内装はクリスマス一色で、立食形式のパーティーにもってこいのオーダーブルから、軽食にデザート、アルコール類がズラリと並ぶ。

「ああ！あれ、この間の世界大会で優勝したシヨコラテイエの作品だ」

焰香は上機嫌で会場を眺めていたが

「ほら、よそ見しない。仕事する！」

黒の叱責でわざとらしく、溜め息をついた。

「はい。あ。なんでこんな事、やってるんだか」
確かに。外交問題に発展する恐れからか、軍人はただの一人も居なかった。

でも……

「SPが居るんなら、あたし達って必要なわけ？」

国賓ともなれば、SPがぞろぞろ付く。

見渡す限り、黒服、黒服、黒服……。

もう、真っ黒なサンタの格好をしていようが、いつもの奇抜な軍服を着ていようが、バレないだろうとさえ、思う。

「そんな、拗ねないでよ。ほの」

不満そうな焰香を見つけ、ニコニコとやって来たのは女王の詩織。目も覚める、ブルーのドレスに身を包んでいる。

その容姿は、まるで年齢不詳だ。

「叔母さま、もう帰って良いですか？」

人の山にうんざりした。

何かと後ろ指をさされる事が多く、昔から人の気配に敏感で。

こういう警護の仕事は、余計に神経を使うのだ。

「もう少し、居てくれる？」

ええー。と盛大に抗議をしようとしたが、詩織の顔が近付いてきたので、一旦口を閉じた。

そうして、耳打ちをされた言葉は衝撃的で。

「実は『血染めサンタ』が……この会場に居るらしいのよ」

『血染めサンタ』とは一時期、名の知れた猟奇的な殺人鬼だ。

真っ赤な服に、白い髭。

大きな袋を担いだ、太つちよな体。

まさに、サンタクローズ。

そんな姿で警戒されずに近付き、賑やかな音楽で悲鳴を掻き消す。

血に染まった袋を引きずっていく姿をクリスマス・イブの夜に目撃

され、この名がついた。

翌日のクリスマス朝。

綺麗な箱に入れられた彫刻のような死体がツリーの下で見つかるという、かなり猟奇的な犯行の恐怖のサンタ・・・だった。

というのも『血染めサンタ』は昔、凶犬 が始末したのだ。

が、今でもその名を語る模倣犯が後を絶たない。

特に年末は、人ごみを利用したテロなどが多く、もう何人の『血染めサンタ』を処理した事か。

「まさか、またですか・・・」

そう黒がうんざりするの、無理はない。

「とある人が居なくなっただの。それに血染めの袋が見つかってね。

それは獣の血だったんだけど。悪意を感じるでしょ？」

詩織は声を潜め、周りを警戒するように見回した。

「その人、一応来賓の方なのよね。まだ、秘密だけど知られたら、困るでしょう？」

確かに、それはマズい。非常にマズい。

『血染めサンタ』なんて呼称を使っている奴は、派手好きと相場が決まっている。

こんなところで問題を起こされたら・・・。

外交問題どころか、戦争の火種にすらなり得る。

「よろしく頼むわ」

「わかりました、隊員達にも伝えます」

「と、いうわけで。 厳重警戒体制でよろしく」

「了解！」

黒いサンタが集まって、ビシッと背筋を伸ばしている様は、圧巻だ。人目に付かないよう寒空の下だが、今はそんな事を言ってもらえない。

「どうします、隊長？」

「んー。面倒なことになってきた」

困ったように腕を組んで、考え込む焰香と首をかしげる隊員達。

「やりにくい仕事なのは、確かだね」

さすがの黒も、頭を悩ませている。

「だからこそ 凶犬 に仕事が回ってきたんだろうけど」

会場にだって、場を盛り上げるためサンタの格好した人はいる訳で。全員に取り調べなんて真似も出来ない。

この国の責任にされかねないため、速やかに事件を解決する必要性がある。

だからこそ、詩織も 凶犬 に頼んできたのだろう。

「一応、監視をつけときます」

「ん、そうね。取り敢えず、泳がせようか」

「動きがあれば報告します」

「それじゃ、任せたよ。解散！」

そう締めくくると同時に、隊員達は散って行き。

残った焰香は、夜空に白い息を吐き出した。

「あーあ。なんで毎年こんなクリスマスなんだろう」

言ってしまったから、それこそ毎年この言葉が出るな。と苦笑を溢した。

「どう？」

周囲に聞こえないよう、焰香は声を潜めた。

「もし、死んでいたらどうします？」

誰というまでもなく、いなくなった来賓の事だ。

外交問題以上の話になるだろう。

「そうだったら・・・また別の処置を考えるわ」

にこっと笑う詩織。

言葉の意味を理解しつつ、焰香も微笑み返した。

「えー。また私達の仕事が増えるじゃないですか」

と・・・背後から

「隊長」

囁くように小さな声。振り向かずに

「見つかった？」

と問うと、また返事は小さい。

「はい」

その低く抑えた声は、すでに臨戦態勢で。

焰香が「Go」と言うだけで、駆け出していきそうな勢いだ。

「”探し物”の方は？」

「無事です」

その人の無事に安堵するより、余計な仕事が増えなくて良かった。という方が強かった。

「そう。じゃ『サンタ』の方を始末しますか・・・」

隊員達に合流しようとする焰香を、詩織が止めた。

「待って」

ニツコリと微笑んでいる。

「ねえ。こーゆーの、どうかしら？」

「疲れたあー」

>凶犬くの仕事を一通り終え、隊長室に帰ってきた焰香はすぐさまソファーにダイブした。

既に時計は12時を回り、25日。

今年も慌ただしく過ぎてしまった聖夜に、隊員全員で乾杯した。

「まったく、叔母様もすごい事するわ」

琥珀色の液体を流しこんで、満足そうな焰香はクッションに頬擦りする。

「あー大変だった・・・」

そう、本当に大変だったのだ。

それまで誰にも知られぬよう>凶犬くは、動いていたのに、いきな

り詩織が

「会場に知れわたるくらい、派手に捕り物をやって」と、頼んできた。

それには勿論、裏があつて。

> 凶犬くが派手に解決する事で、事件解決を会場全体で祝い、安全管理への避難を反らそうという目的と。

この国には、そんな優秀な部隊がある。と周辺国への牽制の意味だ。勿論、焰香はアレだけの言葉で、その意味を正しく理解した。

「はいはい」

それまで、ピリピリと張っていた警戒を解き、静かに微笑んだ。

「じゃあ、こんな小物。さくつと始末しましょ」

その言葉通り事件は素早く、そしてなるべく映画のワンシーンのように華麗に片付けた。

もう最後に、拍手喝采だったのは言うまでもない。

「来年は、サンタの格好はヤダねー」

クッションを抱き、焰香はもう眠そうだ。

というか、半分眠っているのではないか。と思えるほど、目が開いていない。

「なんで？」

毛布を持ってきた黒が一応、問うと。

「サンタがいつぱい居ると、あ、サンタさんだ！っていうありがたいみが無いから」

焰香はそう、無邪気に笑って言った。

酒に酔ったな。と、呆れながらも毛布を掛けてやると、その柔らかい毛布を体に巻きつけ焰香は幸せそうに呟いた。

「だから・・・来年は私、以外をトナカイにしてもらおうー」
「・・・」

酔っぱらいの発言で、隊員達の間に一瞬の沈黙。

皆、顔にこの人ならやりかねない。とバツチリ書いてあった。

対して、何も知らず気持ち良さそうに眠っている焔香。

皆、気付いていないのだろうか。

毎年、忙しいと言いながら同じ光景が繰り返されているのを。

そんな和やかなクリスマス肌で感じ。

この事は本人達が気付くまで、秘密にしておこうと黒は思った。

サンタさん退治（後書き）

クリスマス編です。

今回は、間に合った！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1117u/>

S i l v e r C a t

2011年12月24日01時56分発行